329
148

始

ヱ1277
329-148

帝國圖書館藏

痴遊義士傳

討入の卷

大正
1.10.4
内交

大石良雄

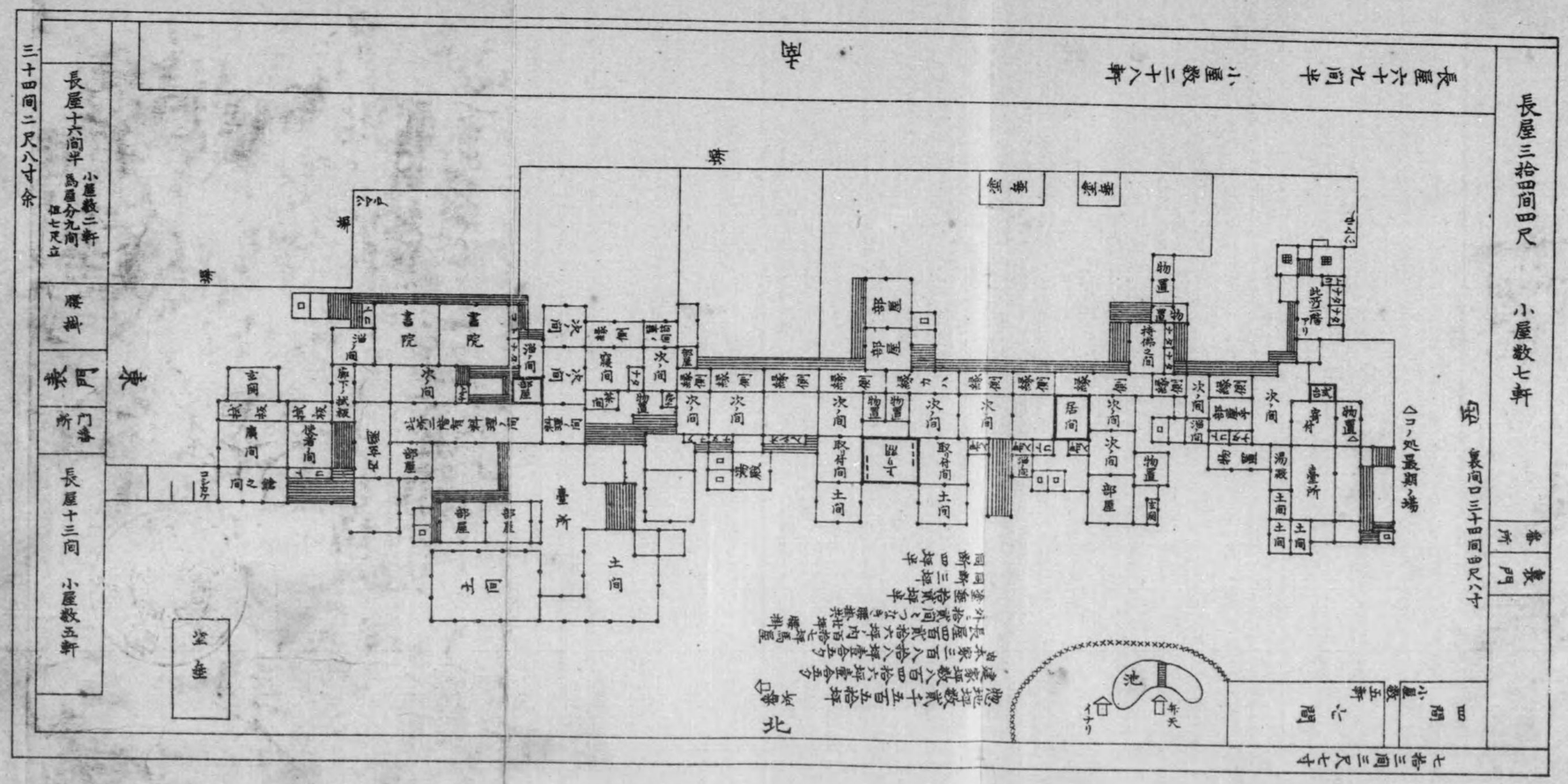
汝良雄等固執主從之義復仇死于法百世之下使人感奮興起朕深嘉嘗焉今幸東京因遣使權辨事藤原獻弔汝等之墓且賜金幣

宣

明治元年戊辰十一月五日

長屋三拾四間四尺
小屋数七軒
長屋十六間半
小屋数二軒
長屋十三間
小屋数五軒
三十四間二尺八寸余
書院
玄関
廊下
部屋
空地

討入當時吉良邸の間取圖



敍

赤穗義士の偉蹟は幾多の極印は打れつゝあるなり、其の書また汗牛充棟にして、是非の如き自ら明晰なりとす。坂井虎山翁が四十七士を詠じたる詩に曰く、若使無茲事、臣節何自立、若常有茲事、終將無王法、王法不可廢、臣節不可已、茫々天地古今間、茲事獨許赤城士。

然り復讐は王法の許さざる處なり、不具戴天の讐は臣子の忍び難き處なり。王法に背かざらんか、臣子の情は捨ざるべからず、臣子の情を主とせんか、王法に背くを如何せん。茲間に處して茲事を爲したればこそ、

赤穂義士は武士道の花と呼れたれ、日本魂の權化と稱されたれ、萬世不朽に強い力を有する教訓となつて遺る也。されば義士の事柄と云へば皆人口に膾炙し、珍説奇談の埋沒して世に現れざるもの無きが如きは殆どなし、彼れを談ずる者は只だ幾度も洗張り洗濯をするのみ、而もその洗張り物や洗濯物をして、新に歡迎して措かざる傾きあり、是れ他ならず、赤穂義士の偉大にして、其の擧の壯烈を快哉するの結果に因る、自然の趨勢が産出するところの現象に過ぎざるなり。

殊に近時義士を迎ふる聲大きく、天下靡然として之に赴くの慨ありき。斯くの如き潮流に浴するものは、

只だ義士といふ名のみに眩惑され、談ずる者も聽く者も虚實の混交を恬として顧みず、奇怪なる揑造説も正傳と誤まらるゝに至り、縱横に彩る絲の縞柄不規則に織り込まれ眞僞の分明を缺くは、誠忠以て我が武士道の神髄を發揮したる、義士其の人の精神を掩蔽しつゝあるに異ならずとせんや。是に於て奮然意を決し、正史に因る義士傳を平易に説き、眞の武士的思想の光輝を放射せしめんとするに在り。故に諸書を渉獵し先輩に糺し、精華を拔きて先づ本傳を編みたるは、坊間に輾轉する書の如く、徒に金銀を塗し色彩を施して裝飾するものとは撰を異にし、眞面目を赤裸々に發揚して

誠忠無二なる義士の本意を公にするにあり、請ふ一讀して以て讀者を欺かざるの注意を知らん哉。

壬子初秋

著者識

痴遊義士傳 討入の卷

目次

一　時機漸熟す……一
二　首途の酒宴……一〇
三　寒夜の息繼……二〇
四　衝天の鋭氣……二九
五　東西の兩組……三八
六　東組の乘込……四七
七　邸内の狼狽……五六
八　贅口御無用……六四

九　闇中の閃電……七三
一〇　斷弦と折刀……八二
一一　蒔繪の薙刀……九一
一二　水音の反響……一〇〇
一三　敵中の英雄……一〇八
一四　西組の門破……一一七
一五　出し不申候……一二六
一六　壁脫の曲藝……一三五
一七　雪中の腥風……一四四
一八　月下の紅雪……一五三

一九　氣轉の火影……一六三
二〇　居間の立退……一七二
二一　廊下の邂逅……一八〇
二二　塀越の挨拶……一八九
二三　脫殼の微溫……一九八
二四　庭前の奮鬪……二〇七
二五　叱咤の妙機……二一六
二六　合圖の笛聲……二二五
二七　義央の最期……二三四
二八　裏門前の曙……二四四

329-148

痴遊義士傳 討入の巻

伊藤痴遊 著

一 時機漸熟す

日本武士道の花といはれ、芳しき名を千載に遺しました、赤穂浪士四十七人が復讐に關する傳記類は實に夥だしいもので、積で數萬卷にも達しません。勇壯殺伐な氣風でございました世の中も、續く泰平に上下遊惰に耽つて、身分のある人も青樓へ登るを恥といたさず、兩刀を腰にして芝居を見物するなど士氣の衰へた時、青天の霹靂とでも申しませうか、ピカリガラ〳〵〳〵と唐突に來たやうな鹽

目次

二九 御手打の上……二五四
三〇 名譽の引揚……二六四
討入の巻終

梅で、人々の度膽を抜かれましたので、其の評判は忽ち高くなり、二百十餘年の今日までも義士の復讐談といへば、小説でも講談でも乃至芝居でも淨瑠璃でも、或ひは浪花節でも世間から歡迎されて居ります。義士談が何うしてそんなに歡迎されるかと申しますと、元祿の壯擧は實に忠君愛國が土臺となりまして、人道の本義を全ふいたした日本固有の日本魂の發揮でございますから、何百遍となく洗濯をしたり洗張をしたりしても飽きられない強い力を有つて居るからでございませう。處で義士實傳など〻最もらしい看板を掛て、口演を致しまするものでも、種々に揑ち擧げたものが多いので、實傳など〻云ふことは思ひも寄りません。大抵は見て來たやうな嘘でお茶を濁し、喋舌つて居る本人は得意になつて、何うだ乃公ほど義士傳に精通した者はあるまいと、法螺を吹き立て〻居りますは鐵面皮もまた甚だしい次第でございます。殊に忠魂義膽で五體を固め、

艱難辛苦を凌ぎ漸う本懷を遂る要の討入となると、只だ一席に輕々と讀流して了ひますは遺憾の至りで、龍頭蛇尾とは此の事でございませう。私が義士の討入は憚りながら其樣不穿鑿な、根據も何もないやうな怪からん嘘ッ八ではございません。義士の書と云ば大抵は調べもいたし、又大家先生方の說も敲きまして、實說中の實說でビリ〻とも動かない處。自慢ぢや無いが如何なる先生方の前でも、決してビク付やうな處は一ケ所もございません、其のお積りで駄法螺ものとの相違をお比べが願ひ度い。

元祿十五年極月十四日は、播州赤穗五萬三千石の城主從五位下朝散大夫淺野內匠頭源長矩の遺臣大石內藏助良雄等四十有餘人が、舊主の怨敵たる前の從四位下侍從少將吉良上野介義央を討て、本懷を達した日であることは新しい記憶を呼返すまでもない、文弱に流れんとした士氣に興奮劑を與へ、千古不朽に美しい名を遺した時で

ございます。

十二月の半といへば只さへピユー〳〵風の吹き荒み寒い時節、十三日は就中前夜からの大雪で、江戸八百八町は一面の銀世界でございましたが、夕方になつても小歇みなく彌が上にも降り積り、雪は鵞毛に似て飛で散亂し、人は鶴氅を被て立て徘徊すといふ光景で：日が暮れては道往く人も絶え〳〵と相成り、平生は芋を洗ふやうに混雑します盛り場も、何時になく寂寥して僅に戸を漏る火影の雪にチラ〳〵と輝くばかりでしたが、十四日には朝から雲切がして霽模様となりましたので、一同の喜びは一通りでは無かつたらうと思はれます。

豫ての約束でございますから、浪士の面々は三々五々覺書の第一條に由て、定めてある三ケ所へ追々と繰込んでまゐります。此の三ケ所と申は本庄林町の堀部安兵衞武庸の宅、本庄三ッ目横丁の杉野十平次次房の宅で、是れはみな浪人の劔客と觸込で借宅いたし居つたのですから、大勢の人が集つても怪まれることがありません。今一ケ所は神崎與五郎則休と前原伊助宗房が、本庄の二ッ目相生町三丁目に小豆屋といふ屋號で米屋を出してゐた家で、當夜の敵吉良の邸に最も近いところ、茲が林町へ集つた者と三ッ目に集つた者が落合ふ最後の集合點でございました。

扨討入に就ては覺書と起請文に一班の方略が示してありますから一寸披露いたしておきませう。

起請文前書之事

冷光院樣御怨敵吉良上野介殿可打取志有之侍共申合候處此節大臆病之者共變心退散仕候族を差舍き只今申合必死と相極候面々は御靈魂可被遊御照覽候事

一上野介殿屋敷へ押込候働之儀功之淺深不可有之上野介殿印

時機漸熟す

揚候も警固一通りの者も可爲同前候然る間組合働役好申間敷候尤前後之事不可致候同衆之義一味致合體如何樣之働役に相當候共少も難澁申間敷候

一一味各々存寄被申付候處含自己之意趣申妨げ候義有之間敷候誰にても當然可申合兼て不快之心底有之候共働之節各所を專に可相働事

一上野介殿十分に討取候共一命遁可覺悟無之上は一同に申合候て散々に相成間敷候手負之者互に助合其場え集可申事

右四箇條相違之時は此大事成就不可仕然ば相背候者は退散大臆病者と可爲同前事

覺

一定日相究り候はゞ兼て定候通前日の夕刻より物靜に定置候三箇所へ集可申事

一定日之印揚候へば引取に可致持參其時は首尾次第其體之上着を剝包持參候事

一途中にて御見分之方有之時挨拶に此印は亡主の墓へ持參仕度存念に御座候然共御許無之候はゞ不及是非候御惡み之印むざと打捨可樣無御座候上は御下知を以て彼屋敷へ被遣候樣にも可有御座候其段は御差圖次第可仕候首尾能持參候はゞ泉岳寺御墓へ備へ可申事

一子息之印揚候はゞ不及持參打捨候覺悟心得之事

一味方之手負は隨分成次第に引退分別肝要に候然乍肩に懸候義難澁候はゞ印揚候て引取可申事

一上野介殿討取候時相圖之小笛を段々吹懸總容へ可爲知事

一鉦之相圖は總人數引取候時打可申事

一引取場は無緣寺たるべし但し無緣寺へ不入候はゞ兩國橋際廣場

時機漸熟す

へ打寄可申事

一引取候途中へ近所之人數出押留候節は其實を告候て私共何方へも隱れ去る事更に無之候無緣寺迄引取公儀より之御使を受旨意可申上志に候去乍無御心許御思召候はゞ寺迄御付可被成候一人も立去候者無之旨可申事

一彼屋敷より追掛候者有之候はゞ總人數踏止り勝負可仕覺悟之事

一勝負之内御檢使有之候はゞ門不開候て潛より一人出只今兩人共討留候て味方人數呼集候て御下知を可受覺悟に御座候私共一人も遁去候所存曾て無之旨可申候門を開候樣被仰付候共開不申候て挨拶可申候打入候者共屋敷中打散罷在候へば門内へ御入被成候時卒爾之義無心許奉存候最早段々打寄候間追付門を開可懸御目旨申上堅く門を開申間敷事

一退口は裏門より引取可申事

一午勿論之義討留候覺悟總容必死之心底致決定候右者引取候節之覺悟胸中に含候て討入候得者臆病に似たれども然共退去候ても必死之面々に候得者討入時之丈夫之覺悟專要之義に候不及申候得共名々必定粉骨之働尤候也

この覺書は一味同盟副將であつた吉田忠左衞門が筆を執つたもので、同志に頒ちましたは十二月二日頼母子講に假託て深川八幡前の大茶屋でございました。此の時の人數は四十九人でしたが、さアと成ると兎角生命の惜しいものか、四日には矢野伊助が出奔する、十日には毛利小平太が驅落いたしました、この十日はいよ〳〵討入がれます、それで討入のときは四十七人となつたのでございました。最も同盟を脱した臆病者は矢野毛利の二人のみではございません、

内藏助と肩を並べて居りました千石取の奥野將監、四百石取の河村傳兵衛、または江戸屋敷詰で急進派であつた高田郡兵衛、内藏助の家來瀨尾孫左衛門、またはお馴染の小山田庄左衛門など七十餘人ございます、斯く多くの變節漢の臆病侍はありましたが、唯だの一人でも裏切をなし吉良家へ内通した者のなかつたのは、蚤の睾丸ほど恥辱といふことを心得て居つたからで、まだ〳〵二十世紀の背德漢に比べては、純朴な時代思想に支配されて居たことも追想が出來ます。

二　首途の酒宴

兩國矢の倉米澤町に浪宅を構へて居りました堀部彌兵衛金丸は、一味同盟中の高年で七十六歳の老人でございますが、老てます〳〵壯なるとは此樣人をいふのでございませうか、十二月の十日に大高源五忠雄が吉良上野介が年忘の茶の湯を催すことを探り出す、また横川勘平宗利も同じことを、共に兩國に住居いたし吉良左兵衛の師匠で、四方庵山田宗遍から聞出し、それではと、十四日の夜に仕懸ると極つたのでございます。扨いよ〳〵左樣極りますと同志の人々は勇氣日頃に百倍します中に、年こそ取つて居りますが彌兵衛老人何條壯者に劣るべきやと意氣天を衝き、當日の到るを指折數へて待ちに待つて居りました。

いよ〳〵十四日と成る、晝間から討入の首途と祝ひの準備を、武士が戰場に赴きまする出陣の吉例に形取り、それ〴〵の用意萬端を老人自ら指圖いたして整へさせ、さア是れで可しと成るとドッカリ腰を据ゑ、尋ね來る同士を對手にグビリ〳〵と飲み乾し、頗る上機嫌で今宵を過ぐれば、生命を賭して本懷を貫き達せんとする、大望の目前に横はるとは更に思はれざる如く、綽々として餘裕ある大

丈夫でございます。

空は紺靛を流したやう晴れ切つて一點の雲もなく、星影は瞬きをするやうに光を放ち、十四日の月は今や東天に昇らんとする夕まぐれ、戸外は雪明にまだ暮切りませぬ時、路次口にピタリと二挺の駕籠が下りますと、立派な武家が二人ッ、ト彌兵衛の浪宅へ訪問ひ、

『御老體、お在やるかの。』

と云ふ聲に彌兵衛は耳を欹てまして、

『やア、お出でやつたか……御遠慮なうッ、ト……。』

と自ら出迎へました客は、黨中の總大將と仰ぐ大石内藏助良雄が、石町の僑居より人々を出し遣つた後、それ〳〵後始末を附けて小野寺十内秀和と駕籠を傭ふて、本庄林町の堀部安兵衛武庸の宅へ乘込んで參る途中、まだ時間が少し早うございますから、矢の倉の彌兵衛老人の宅へ立寄つたのでございます。居合すものも素より生死を

誓ふた間柄、年に相違はあつても遠慮のあるべき筈はございませんから、直ぐ二階へトン〳〵〳〵と上がる、彌兵衛は最う大分廻つて居りますが、中々酒に精神の紊るゝやうな爺さんでない。燈心蜻蛉ほどの髷が乘つた藥罐頭も色揚をしてテラ〳〵光らせ、

『好うこそおぢやうた……肴は無くとも先づ祝ひの盃、一獻參らう。』

『これは辱けなふ過し申さう……流石は御老體の御用達奥床しうおぢやるのう十内殿。』

『如何にも……出陣の儀式に習はれた御肴、戰鬪にかち栗、勝てよろ昆布など時に取つて好い幸先でおぢやるワ。』

と小野寺十内も手を拍つて喜び、獻酬一順いたしました頃、今度はお吸物が出ました。内藏助は吸物の蓋に手を掛け、

『ハハ、、、菜鳥の吸物でおぢやらう。』

と云ひますと、彌兵衛老人は莞爾いたし、

『寒鴨一羽料つておぢやる。』

『敵の首級を擧げて名を末代に取れとの謎……今宵の吉兆でおぢやる。』

と十内は申しましたので一座興を催し、盃の獻酬は段々と重なり主客打寛ぎまして、元氣な彌兵衛老人ます〳〵意氣昂り、内藏助が受けた盃を下に置きますのを見詰めて居りましたが、

『大夫殿、御自身からお約束を破らるゝかな……。』

と笑ひながら申しました。彌兵衛が斯う申しましたは、嘗て内藏助が盃の中に五章の約束を定め、第一の箇條書に喧嘩口論堅く無用、第二は盃を下に置くべからず、第三はしたむべからず、第四はおさへざる事尤も相手によるべし、第五はすけ申間敷事但し女はくるしからずと、下馬札の内に認めました盃を造つたことがございますからで、其の盃は内藏助の遺物として安場男爵家に、今も家寶となつて傳へられてある有名なものでございます。流石の内藏助も是れには一本參らされまして、

『アハ、、、是れは近頃の龜相でおぢやつた……左樣なことはお忘れやるものぢやに、我が絢ふた繩で我が身を縛り申すとは、この事でおぢやらう……』

と機嫌よく飲み乾て彌兵衛に獻す。居合した人々もそれ〴〵に今宵の集合所へ出懸て往つた、其のあとでまた暫くは談笑の間に酒を汲み交しまして、常の酒宴と少しも變ること無く、夜の更けるまで平然として目前に迫る今宵の大事を知らざるもの〻如く、泰然自若と致し居つたと申すことでございますが、此の心懸があつて始めて大事を遂げ得られるので、膽の据る處が違つて居ります。我々どものやうにオイ來た流で遣つた日にやア一度で打壞し、大失敗を仕出來

します、失敗は成功の母なりとか申しますものゝ、此樣ことの失敗は取つて返しの付くものでありません。主人も客も心置きなく枯木の春を迎へたやうに、胸中に滿々たる勇氣を抑へて盃を旋らすうち、夜は深々と闌に相成りまして、四邊も寂寥と致し人の往來も途絶える子の刻、只今の時間では十二時頃ほひと成りましたので、小野寺十内は盃を彌兵衛に返しまして、

『最早時刻も移つて參つた、是れで納盃といたし徐々お支度あつては……』

と内藏助の方へ膝を向けて申しますると、輕く首肯く内藏助は、

『お心入れの馳走千萬辱う存じ申した、我等は一同への指圖もおぢやれば、一足お先へ參る……』

『堀部氏、いかい馳走でお先へ御免下されい。』

と十内も挨拶いたして二人は堀部の浪宅を辭し、戸外へ出るを彌兵衛も路次口まで送り、

『空にも心にも掛る雲なき明月道を照すは……』

と申しますを、十内が引取りまして、

『是れぞ今宵の道しるべ、御同前に執着でおぢやる。』

と三人は微笑みて別れ、内藏助と十内の妻は軈て横丁に隱れて、本庄林町は堀部安兵衛の宅へと赴きます、跡は月に吠る犬の聲のみが夜半の靜さを破つて物凄く聞えました。

彌兵衛老人は宵の口から同志の人々を饗應いたし、大分酒も飲で居りますので、うつら〳〵睡氣がさして參りました。

『あゝ睡うなつた、討入までにはまだ時刻もある、一寸と一睡して英氣を養はふ、時が來たら起して呉れい……』

と云つて肱を曲て轉りとなつたかと思ふと、直ぐ鼾が雷のごとく起つて前後も知らず夢中の人となりました。尋常大抵の人なら此樣場

合にグウ〜〜寢られるものでありませんが、流石は天下の豪傑……
彌兵衛の甥で堀部九十郎、佐藤條右衛門と申す二人がございます、
當時は浪人いたし居りますが、今度の討入には蔭ながら盡力をした
義人、今日も朝から伯父の家へ參つて何かと手傳つて居ましたが、
稍や丑の刻とも相成りましたので、
『伯父上、最うお目覺なされて宜しふおぢやりまする。』
と輕く搖り起しますと、彌兵衛はウーンと伸びをいたし、
『左樣か、最う八ッ時に相成つたか、さらば打立たう……』
と日頃得意と致して居る長槍を突き立て、元氣よく立ち出やうとし
ます時、婿の安兵衛と許嫁の今年十七になる娘の幸女が靜かに彌兵
衛の袖を引きました。
『これ何を致す、未練であらうぞ。』
と彌兵衛は不興氣に見えますを、幸女にあつては少しも周章る樣子
なく、
『目出度今宵の御首途、決してお留め申す儀ではございません。豫
々お話に承はりまするには、今宵のやうなお働きの時は柄の短
きお槍が御便利ではあるまいかと存じ付ましたので差出がましふ
はございますが……』
と手を突き慇懃に申しますを、彌兵衛は忽ちの機嫌
『オ、能うぞ氣が注いた、辱い……』
と云つて短刀を引拔きますと、ズバリ槍の柄を手頃に切つて捨まし
た。傍に居ました條右衛門が膝をポンと打つて、
『出來されたお幸どの、流石は伯父上のお娘御でおぢやる……
それにしても鐔が爲うては協ふまい、伯父上、拙者が……』
『オ、條右衛門頼む。』
と彌兵衛が申しますから、條右衛門は手早く鐔を附て差出すを、

二三度突馴らして置いてリウ〳〵と扱き、然らばの一言を跡に殘して本庄相生町は最期の集合所へと、出で行く勇ましさ七十六の老爺とは思はれません。

三　寒夜の息繼

さて同盟の人々は、立鳥も水を濁すなといふことがございますから、赤穗の浪人は喰ふに困つて、捨撥になり吉良家へ狼藉に及んだと云れてはならぬといふ注意もございましたので、十四日の朝急に明日上方筋へ參るやうに成りましたと、それ〳〵店賃を拂ひまた買掛のある者は悉皆拂ひをいたしたり、知己の處へ暇乞に參つたり、或は荷物を片付などいたして、銘々に假住居を引き拂ひ、今夜は懇意先で一晩厄介に成るといふ口實で、日暮に風呂敷包を肩に懸け雪を踏んで出掛ける。中には兩國矢の倉の堀部彌兵衛の宅へ立寄り、首途の酒を酌むもございます、又は知己の家へ參つて飲んだり食たり、或は寢轉んだりして時刻の來たるを待つ者もございました。

義士の四十七人が、回向院前の饂飩屋久兵衛の家へ集つて、蕎麥切を喰べ酒を飲んで居りますと、主人が口癖のやうに『何のそのなんのその』と言て居りますを、大高源五忠雄が聞き咎めまして、

『先刻から聞いて居れば、何のそのなんのそのと申して居るが、そりやア何のことである。』

と聞きますと主人は頻りに頭を搔き、ひど〳〵恐れ入つた體でございましたが、揉手を致しながら、

『實は何でございます、へ、、、、何のそのといふ冠付の題が、俳諧の運座に出ましたので何うしても出來ませぬから、ツヒ口癖のやうに何のそのなんのそのと申して居りましたのが、お耳障りになり恐れ入りました。』

『あゝ、左樣か……俳諧の心掛があるとは面白い、亭主一寸筆をかせ……』

と帳場硯を借りまして鼻紙にさら〳〵と一句を書き、

『何うぢや、是れでは點になるまいか。』

と差出しましたを久兵衞おし戴き、

『なんのその巖をもとほす桑の弓……是は何うも有難う存じます。占た！』

と雀躍して喜んだと申すことは講談師の得意として饒舌ります、大高源五饂飩屋の條でございますが、講談ばかりでございません、浪花節でも遣ります、復讐談を書いた有名な本のうち赤穗記では、同盟の義士が饂飩屋久兵衞の店に寄つて何のその巖をもとほす桑の弓の句を竹林唯七が詠だと書いてあります。義人錄では本庄の或茶屋へ集合したとあつて、此の句を詠だものゝあるとは載てゐますが、

義士の一人某とございます。また一夕話には蕎麥屋が楠屋十兵衞となつて、俳句は大高子葉の詠だことになつて居ります。處で寺坂吉右衞門の信行記を見ますると、斯樣ことが書いてございます。

本所饂飩屋久兵衞へ集り候も虛說なり、上野之介屋敷の近所と申し、左樣卒爾なる事無之候、堀部彌兵衞殿は神崎の店へ參り支度の由、忠左衞門殿澤右衞門殿惣右衞門殿其外六七人、兩國橋向河岸龜田屋と申茶屋へ立寄り、そば切など申付緩々被休息候、八ツ時前に三ツ目堀部安兵衞どの宅へ被參、內藏助殿御父子など何も被致裝束候。

寺坂吉右衞門の書た記錄には世間に種々の批難がございますが、是等は確實な事實と信じられますから、義士の面々が一同饂飩屋または茶屋に寄合たと云ふことは、一切信用することの出來ない說でございませう。さうすると何のそのゝ俳句もグラ付て來て怪しくな

りますが、大高源五は俳諧を水間沾德に學び俳名を子葉と申しまして、上手の聞えがあつた人でございますから、豪爽な句表から考へても大高子葉の詠だものと思はれる。併しこの句を何處で詠だかといふことになると、さア夫れはと言ねば成りませんが、饂飩屋久兵衛の店へ大勢集つた事は無いのが事實であるけれど、宵の口は三人五人と諸所で飲だり喰たりしましたのだから、子葉も三四人と囘向院前の饂飩屋で寒さ凌ぎに、饂飩で熱燗を引掛た事が爲いとは斷定を下すことは出來ません、それで快擧錄などには大高子葉が五六人で饂飩屋久兵衛の店へ立寄つて、何のその句を吟じたと書いてございますから、自分も暫く此說に據つて置きまする。序に一寸云つておかねばならないのは、此の日大石内藏助が故主の奥方瑤泉院の許へお暇乞に參つたといふ事や、淺野土佐守の邸へ伺候したといふ南部坂雪の別れなどゝ、盛んに呼物にして聽衆諸君を引附けて居ります事柄は、痕跡もない虛構で甚だしい嘘でございます。從來の講談は兎角斯ういふ虛說で固め上げて居りますから、事實を誤ることが最も多い、是れでは折角義士の講談を致し又は武士道皷吹なんてッて、豪さうな看板を振廻しましても、唯だバンの材料にするまでゞ實說として傳へることが難かしい、赤穗義士實談の演者で漢學者である信夫恕軒さんも、赤穗義士傳に關する無根の十三ヶ條と云つて、左の十三項目を數へ擧げて居られます。

（一）大石の十八條申開きは無根なり（二）南部阪雪の別は無根なり（三）吉良の邸へ細作として、堀部彌兵衛の娘と間重次郎の妹が奥女中に忍んで居たことは無根なり（四）大高源五の煤竹賣は無根なり（五）饂飩屋には集合せず（六）寺阪吉右衛門は出奔せず（七）山鹿流の陣太皷は嘘（八）土屋方の斷りは無根（九）服部市郎右衛門烏有也（十）仙臺邸の粥も無根（十一）赤埴源藏は大下戸にて汁

なり（十二）大石は素行の附人ならず（十三）

なり

贅事はさて措きまして、義士の面々は約束を

の集合所本庄林町の堀部安兵衛宅へ繰込で參りました

門信行は、吉田忠左衛門の命を受け、子息澤右衛門兼貞、

門元辰、不破數右衛門正種と吉右衛門の五人が同宿いたして居りま

した、麹町六丁目大屋喜左衛門の裏店を出發後の始末を殘りなく致

し、自分の用事も達して兩國矢の倉の堀部彌兵衛が住居に尋ねて來

ましたは、最う八ッ時、只今の午前二時で彌兵衛も今出發したばか

りでございます。戸締はしてあるが隙間漏る火影は、まだ宵の如く

家内も何となく混雜して居る樣子……吉右衛門は

『堀部樣！　堀部樣！』

と二言聲をかけますと、老女のこゑでハイと應答て出て參つたは彌

兵衛の細君。

『何方でございます。』

『吉右衛門でおぢやりまする……堀部樣には最うお出ましに相成り

ましたか。』

『ハイ、只今……』

と聞きまするや、吉右衛門におきましては、然らばと辭し去らうと

致しますを、

『吉右衛門どの、先づお待ちやれ。』

と急に戸を開られた。吉右衛門も後れたと心は焦慮て居りますが、

まだ討入までに時刻はございます。彌兵衛老人に忘れ物などのある

ので留られるので無いかと氣が注くと、流石に振切つて參ることも

出來ません。

『何か御用のおぢやりまするか……』

と仁王立になつて待つて居りますを、老女は更に騒ぐ樣子もなく、

『何れも樣はそれ〳〵首途のお祝ひ遊ばされましたに、御身許り途の祝ひに漏れられては、延喜が惡うございませう。最う時刻も間近いこと、惡留はいたしませぬから、さア一獻立土器を』

と大きなものに波々と祝酒を盛つて差出されましたに、吉右衞門微笑み、

『それは忝けなうおぢやりまする、然らば頂戴……』

と飲み乾せば盃を下へ置かさず、

『三獻はお式ださうにございます、御遠慮なう。』

『忝けなう頂戴いたいまする。』

と盃を重ね立ながらの三杯に元氣彌增し、然らばと挨拶もそこそこ本庄林町へ駈附けまするとの、一黨は支度を整へ今や繰出さんとする處、吉右衞門あたふた飛込みまして、

『各〳〵樣、吉右衞門奴只今到着いたいておぢやりまする。』

四　衝天の鋭氣

一日千秋の思ひで待ち焦れた、鐵石の如き同盟の士は丑の上刻から下刻、今の午前二時から三時の間に聚りましたは總勢四十七人。人々は手に〳〵携げて參つた風呂敷包を解いて、各〳〵支度に取り掛りましたを觀てあれば、若殿原は多く緋紗綾の褌を締める、年を取つたものは白紗綾の下帶を紐にて首に吊りまする、肌には白無垢黄無垢、淺黄無垢の羽二重下着を思ひ〳〵に着なし、上に繻子や繻珍或は緞子で包んだ喪甲を襲ねました。講談師が身には鎖帷子を着用いたしなどゝ、張扇をピタ〳〵敲き、算木をカチリ〳〵と遣つて居ります鎖帷子は此の喪甲の事でございます。其の上には紅桃色なんどの絹裏つけたる定紋附し黑の小袖を裝ひ、鎖を包みし股引の上

には截着を穿きまして、帶をキリ、と締めたる上へ是れにも鎖を縫込んだ上帶をいたし、脛には脛當、足は陣草鞋陣足袋に固め、兩襟兩袖に白布縫たる羽織をフワリと着なしたり、是れなん夜目にも直ぐに敵と味方を見分くる便利の合符、まッた白布の一端は後へまはして『淺野内匠頭家來何某』と、人々の姓名を記し附け、中には金の短冊に姓名を記して後へ下げた人もございました。斯く扮裝たる上へ鎖入縮緬を扱きて手襷といたし、名香を薫らした兜頭巾を頭上に輕々と戴きまする。この頭巾も多くは黑革包みでございまして、八幡座から白革の筋を入れ好み〳〵の鍬が着いて居ります。斯樣に凛凛しい立派な扮裝は身分ある方々で、同じ物の具衣裝の中にも左まで立派で無かつた人もあるは、遺物を調べて見ても大方は推量が出來まする。

それから此の人々が帶した刀でございますが、何れも立派な腰の物であつたことは、當時專ら噂に登り其の心掛を譽ぬものは無かつた。義士の内には十石二十石の輕い武士や、五兩三人扶持の步行横目などゝいふ人もございましたに、其の人々までが立派な腰の物を帶して居たといふのは、何うも事實で無いやうな氣も致しますが、是れには譯のあることで、淺野家四代目の殿樣で、内匠頭のお祖父さんに當る長直といふ方は、世に聞えた刀劍好きであられたので、淺野家には名刀が澤山ございましたを、赤穗退散の時に臨み、内藏助は豫め今日あるを考へましたから、御遺物と稱して身分の輕い者までに、一口宛を分與へました。然ればこそ面々の腰の物が揃ひも揃ふて立派であつて、佩刀の利鈍にて持主を褒めもし又貶しもした、此の時代の武士質氣を滿足させまするなど、深慮遠謀のあつたことも今更敬服されます。扨てこの差料の柄は銘々平打の木綿絲で卷易へて卷切柄と致しいくら激しく戰鬪ても、手が滑るといふこと

の無いやうにして有つたと申します。斯樣風に豫て用意も致してあることでございますから、夫れ〳〵支度も出來る、各〳〵呼子の笛を襟にかけ、幾干かの金や氣付藥または空腹になつた時の用心に餅を幾切づゝか懷中いたしまする。さア銘々の支度はこれで可しとなると今度は討入の手配……、これもチヤンと定めてありますから、先づ總勢を二つに分けまして、室内に躍り込んで働くもの、室外に在つて警護するものなどを定め、二ッに分たうちを又三人或は四人を一組といたし、强敵に出會した時は互に助合つて味方を傷めない結構で……。さうして一隊を平假名の『い』の字から『さ』の字までを左文字に兜の圓き前立に刻み、又一隊は同じく『り』の字より『よ』の字までを前立に彫り、更に一組づゝを同じ文字、例へばいの字が三人ろの字が三人といふやうに致し、同じ文字の前立ある兜頭巾を戴く者を一組として、お互に助合ふ段取に成つて居たのでございます。

いよ〳〵支度は十分に出來ました。部署は定まりました、待に待焦れた千歳の一遇、義の爲めに君恩に報いる時は今幾分。宛も悍馬泡を含みつゝ手綱に抑へらるゝ如く、手許緩めば忽ち眞驀、如何なる障礙あるとも一蹴し去らんとする勇ましさは、四邊を拂つて手に立つ物もなき光景でございました。時刻は次第に移つて來た、本庄林町の堀部安兵衛方は出發する、三ッ目横丁の杉野十平次方も出懸て、最期の集合點と極めた二ッ目相生町三丁目の神崎與五郎、前原伊助の家へ寄りました。其の扮裝を見てあれば兜頭巾に黑の火事裝束、たゝ總大將が進めの號令を片唾を呑みて待つばかり。肅然として控へる狀は驟雨來らんとして風死し、寂々寥々たる中に殺氣滿ちたる趣が見えまする。

やがて討入と極めました寅の上刻、今の午前四時となりました。討入時刻を丑滿の頃即ち午前二時と云ふ說もございますが、是れは

四時が可いので……小野寺十内の手紙、原惣右衛門の手紙、寺坂吉右衛門の筆記等が何よりの證據となりませう。それに夜明に敵を襲ふは、夜討の定法でございまして、兵法に達した内藏助あり、忠左衛門あり平時の夜襲に定法を守らぬこともありますまいから、必ず昧爽に押寄せたと云ふのが眞當でございます。進めの號令が下りますと、神崎與五郎を案内といたして「淺野内匠頭家來口上書」と文函の上に墨黒々と認めましたを長竿の先へ結付けて、高々と差上げて進みます。續いて得物〳〵を携へまする面々規律正しく繰出しました。この口上書と申しますのは、

去年三月内匠頭儀、傳奏御馳走の儀に付、吉良上野介殿へ含意趣罷在候處、於殿中當座難忍儀御座候て及刄傷候、不辨時節場所働、不調法至極に付切腹被仰付、城地赤穗被召上候儀、家來ども迄畏入奉存候、上使御下知を受け城地差上家中早速離散仕候、右喧嘩の節御同席に御差留之御方有之、上野介殿討留不申候、内匠頭末期殘念之心底家來共難忍仕合に御座候、對高家御歴々家來共挾鬱憤候段憚に奉存候得共、君父之讎不可共戴天之儀難默止、今日上野介殿御宅へ推參仕候、偏に繼亡主之意趣之志迄に御座候、私共死後若御見分の御方御座候はゞ奉願御披見、是如御座候以上、

元祿十五年十二月　日

淺野内匠頭長矩家來

さて此の夜夜襲に用ひました武器を調べて見ますと、

槍	十二筋、	長刀	二振、	野太刀	二振、
弓	四張内半弓二張	鉞	二挺、	大槌	六挺、
竹梯子	二挺大小	大鋸	二枚、	玄翁石鑿	二挺、
木槓杆	二挺、	鐵槓杆	二挺、	鐵槌	二挺、

鎗　六十本、　取鈎長細引附十餘筋、　龕燈　一個、
小笛　數十個、　銅鑼　一個、　玉火明松　數十個、

でございまして、槍は九尺柄に切詰め弓に半弓を加へてあるは、今宵の戰ひが室内戰でありますから其の用意。また大工道具は門や戸を打壞す爲め、鎗を用意いたしましたは、邸内の所々に拔道が作つてあるといふ噂が專らございましたので、怪い處はピン〳〵鎗附にして了ふ考へ、長細引附の取鈎は下から投掛けて長屋の家根を乘越る用意で、其の外もそれ〴〵緻密の用意周く到つて居つたは感服の外はございません。また討入の時山鹿流の陣太鼓を打たといふことは、言傳へられて居りますが、是等はうその皮で張た太鼓で、お練や芝居をするのぢやあるまいし、吉良の邸内に乘込むまでは兵法に申す、枚を含みて靜肅を旨とする場合でございますから、呑氣さうにドーンなど太鼓を打つ筈が無い、銅鑼の用意は引揚げに人數を纏める合圖に使ふ爲めでございましたらうと思はれまする。

斯ういふやうに缺點なく用意が整つて出發しました。素より夜討のことで提灯一張松明一本點けませんが、昨日の大雪は尙ほ往來を埋め、見渡す限り白皚々といふ光景、それに曉の霜は降積む雪を凍らせ、有明の月は皎々として白雪に映じ、差明ばかりにキラ〳〵と照り輝きて晝に異らぬ明るさでございましたから、一同は勇みにいさみ是れぞ全く冷光院殿（内匠頭戒名）の尊靈が冥助し給ふところならん、上野介如何に天に翔り地に潛りて匿るゝとも、白髮首討取つて泉下にまします亡君の尊靈に手向ずして止まんやと、血は沸き肉は躍つて意氣ます〳〵昂り、氣は既に邸内に込入つて居る心を抑へ、肌膚を劈く寒威も何のその霜雪を踏み占めつゝ肅々と進み、吉良の邸近く相成りますると、忽ち止れの下知が總大將から傳はり一同四十餘人は敵の邸を睨み、ピタリと足を止めて整列いたしまし

た。

五　東西の兩組

凜々しい四十餘人が火事裝束で衝天の氣を呑み、整然と列びました狀は、壯烈譬ふるにものなく賴母しく見える、總大將たる大石内藏助良雄は、ヂロリ一同を視やる眼光烱々として月に輝き、思はずも人をして悚然たらしむる慨ありでございました。やがて高からず低からざる落付た壯重な口調で、

『方々、豫ての約束通り此處最期の場と心得、存分に働かるゝが君恩の萬分の一に報い奉る御奉公でおぢやる。……萬が一にも上野殿を討漏すことがあれば、我々の武運も最早それまで……是非なき事と諦めて一時に邸へ火を取掛け、未練なく腹搔切つて亡君に追付奉る所存でおぢやる、方々もその覺悟あれ！』

と判然言ひ切つて、南に向つて遙に泉岳寺の方を拜しました。四十有餘人の人々誰か一議のあるべき、銘々に南の方を遙拜いたして、豫ての手配通り表門より打て入るものは吉田忠左衛門兼亮を大將といたしまして、二十餘人づゝ左右にさッと分列いたしました。

東に面する表門より打て入る東組の人々の部署を見まするに、正面から平押に突進する連名は、

片岡源五衛門高房三十六歳　富森助右衛門正因三十三歳
武林唯七隆重二十三歳　奥田孫太夫重盛五十六歳
矢田五郎右衛門助武二十三歳　勝田新左衛門武堯二十三歳
吉田澤右衛門兼貞二十八歳　岡島八十右衛門常樹三十七歳
小野寺幸右衛門秀富二十七歳

側面から前進するものは

東西の團組

早水藤左衛門滿堯三十九歲　神崎與五郎則休三十七歲
矢頭右衛門七敎兼十七　大高源五忠雄一三歲十
近松勘六行重三十三歲　間十次郎光興五二歲十

表門内に屹立して司令部となるものは

大石内藏助良雄四十歲　原惣右衛門元辰五十五歲
間久太夫正明六十二歲

東面の小さき新門を守つて門外に遁げ出さんとする者を防ぐものは

堀部彌兵衛金丸七十六歲　村松喜兵衛包秀六十歲
横川勘平宗利三十六歲　貝賀彌左衛門友信五十三歲

の四班に組立られまして、第一班は玄關から突いて入る、第二班は側面卽ち外部にあつて敵を室内に入れないやうに働きます役廻り、第三班は現代の軍隊の斛で申すと司令部で表門を脊中にして指揮を致す役、また第四班に當ります五人は東側の小屋七軒から飛出してまゐる者を押へるのでございまして、東組の人數は總勢三十三人。

また西組の方は西の方にある裏門より突き入る一隊でございまして、第一班で小玄關より闖入いたします一組は

磯貝十郎左衛門正久四二歲十　堀部安兵衛武庸三三歲十
倉橋傳介武幸三三歲十　杉野十平次房七二歲十
赤埴源藏重賢四三歲十　菅谷半之丞政利三四歲十
大石瀨左衛門信清六二歲十　村松三太夫高直六二歲十
三村次郎左衛門包常六三歲十　寺坂吉右衛門信行八三歲十

第二班は東組と同じく側面を警戒をいたす役廻りで

大石主税良金歲十五　潮田又之丞高敎四三歲十
中村勘助正辰四十四歲　奥田貞右衛門行高五三歲十
間瀨孫九郎正辰二歲十　千馬三郎兵衛光忠歲五十

No. 114 204 199 79

東西の兩組

茅野和助常成三十六歲　間新六光風二十三歲

木村岡右衛門貞行四十五歲　不破數右衛門正種三十三歲

前原伊助宗房三十九歲

第三班は裏門を警戒いたしながら、南側に面する長屋より飛び出す吉良の家臣を牽制し、西組の指揮に當るのでございます、其の人々は

吉田忠左衛門兼亮六十二歲　小野寺十內秀和六十歲

間喜兵衛光延六十八歲

以上二十四人！

東西二組に分れてヒタ押に表門裏門へと押掛て參りましたが、當夜は大高源五等の偵察に違はず、吉良邸にては大友近江守などをお客といたし、風流な茶の湯の會を催して折柄の雪に興を增し、夜の更るも知らでありました事ですから、邸の人々は上も下も別ちなく

晝間よりの疲れに草臥れ、グッスリ寢込んで了ひました。斯う言てしまへば吉良家は如何にも迂濶極まるやうで、赤穗浪士が復讐の企てなどは少しも知らずに枕を高くして居たのかといふ疑ひも起りませうが、決して左樣ではありません。淺野內匠頭が切腹し家斷絕に及びましてから、復讐の噂はチラ〳〵世間で致しますので、左なきだに臆病風の立て居る上野介、深夜鼠がガタリと音をさせましても、枕刀に手を掛けて寢褥の中で起直るほどでございます。既に上野介が左樣でビク〳〵致しますから、養子の左兵衛を始め家來の面々も嚴重な警戒を怠りません。又上杉家からしても附人が吉良の邸へ詰めて、萬一の用心に寸時の油斷なく邸內は晝夜見知らぬ人の入來るや、ソレ復讐と風聲鶴唳にも股立取つて佩刀に反打すほどでございました。斯うまで用心を嚴重に致しても猶ほ安心が成りませんかして、上野介は多く麻布の上杉家邸內に潛み、赤穗浪士の擧動を探る

に努め、上杉家にても亦た油斷なく探偵を放つて應援しましたが、内藏助が反間苦肉の計略に幾分は警戒を弛め、誰憚るところなく年忘れの茶會などを開き、風流がつた樂みに夜を更しましたも、運の盡きた處で所謂人盛んにして天に勝ち天定まつて人に勝と云ふのも茲等の事を申すのでございませう。

全體この本庄松坂町二丁目の吉良の邸は、元松平登之助の屋敷でございましたを、元祿十四年三月二十三日上野介が御役御免と相成て、吳服橋内の屋敷を召上げられて此處へ屋敷替を仰せ付られた處で、東に表門があつて西に裏門あり、坪數二千五百五十坪建家八百四十六坪餘ある、四千二百石取の高家の屋敷としては廣いやうでございます。東に向つた表門のある方は、一帶に長屋で門の左右に長屋が七軒あつて、往來を隔てた向ふ側は旗下牧野長門といふ人の邸でございました。又裏門のある西の方も門の左右に長屋が是れも七軒、その向ふが町家を雁木のやうに縫ふて回向院でございます。南の方も一帶の長屋でこゝには二十八軒あつて、相生町の往來に臨んで居ります。北の方はと見まするに東寄に松平兵部大輔の家老本多孫太郎の邸、西に寄つた方は長屋が五軒あつて塀を堺に旗本土屋主税の邸でございました。現在の松坂町二丁目五番地東側のところで……東西凡そ七十間、南北三十四間餘の邸を構へて居たのでございます。詳しい屋敷の建方や間取の模樣は、說明いたすと唯諄々しく成りますから、大給子爵家傳來の詳圖を口繪に添へて省きました。何うぞ其の圖に就て御覽下さると明瞭にお解りと成りませう……

同盟の勇士は何れも火事裝束に身を固め、曉天の月光に煌く雪を踏みつゝ堂々と表裏の兩門指して懸つて來ました。此處で一寸斷つて置かねばならぬ事がある、それは討入については皆火消役人の扮裝をして邸内に火事があるから開門せよと、口々に觸れこみました

が開けません、此の表門は構造が堅牢で破壞することが出來なかつたので、手輕い建築であつた裏門を打ち破つたと傳へられて居りますが、是等はとんでも無い間違ひで、初めから裏門は打壞す計劃が立て居つたのでございます。又表門を壞すといふことは斯樣夜襲、殊に火事に假托て本望を達せんと圖つた程ですから決してあるべき筈がありません。當時の掟を見まするに武家屋敷で自火を出す場合、構へ内の建物が殘らず燒けて了ひましても、表門さへ燒けずに居れば、火事は無かつた體裁に取繕ふことが出來、失火の責任を問はれずに濟んだものでございます。斯ういふ慣例のあるので討入當時も之れを利用せんとの結構で、手配りその他のお膳立がチヤンと出來上つて居ります。討入の騷ぎをボヤの混雜のやうに見せ掛け、豫て復讐があらうと心に期して用心してゐる、吉良の家來どもに討入と思はせない手段に組立られて有るのだから、表門を壞すといふことは無いのが實說、奇兵を用ひて敵を斃す計略に出た、この復讐で其樣拙劣な策は取りません。さア是れからが愈々討入の大修羅場、併し空板を敲いて口から出任せ、上願と下願の打附り次第にお饒舌をするのとは大分違ふ……

六　東組の乘込

四更の月は凄いほど冴え切つて、寒威凜冽曉風面を打つを物ともせず、表門に肉薄した東組の一手は、犇々と門前まで押寄せてまゐりますや、二挺の梯子は繼ぎ合されグサリ搔き揚げて山と積まれました雪の上へ建てると、其の儘長屋の屋根へもたし掛る。

『乘り越せ！』

との號令の發するを待ち設けた面々、何とて猶豫のあるべき、梯子の下にあつた大高源五、御免と言つたのが早かつたか、足が梯子へ

掛つたが早かつたか、猿猴の木に攀登るに異らず一番乘は我と、勇み登れば之れに續いたは壯年血氣の小野寺幸右衞門、吉田澤右衞門が梯子に足を掛ける折しも、雪の上に立た梯子勇士三人の重量で、一尺有餘雪中へ潜りこむ機會に打たれ、も既に轉げ落んとしましたが、幸ひなるかな、跡より跡より一隊の身體に支へられ、足踏み外した者も下より押上られまで、轉げ落るものもございませんで、大高源五は速くも屋上上つた。屋根の雪は猶脛を沒し足を踏み込むごとに、グサリ〳〵といふ音が寂寞たる夜陰に響き、鬼氣襲ひ來たるの光景がございました。然れどそんな事にビク〳〵する面々でない、臥薪嘗膽の苦を忍びて今や素懷を達せんとする時節が到來いたし、上野介の白髮首引提げて亡君の尊靈に手向やうといふ場合、八十に近い堀部彌兵衞のごとき老人ですら、血氣壯な若手に劣らじと鋭々〳〵聲をして梯子に登りますする。

一隊を長屋の家根へ登らせた跡に悠々〳〵と梯子に足を掛け、後を振返りました大石内藏助、猶ほ一人我が跡に從ふものがございますので、此の期に及び逡巡するは何者ぞと鋭き眼に一瞥すると、當年六十二歳の間瀨久太夫正明で……四方に眼を配つて更に油斷なき有樣は、流石に老功の注意また格別の處が見えて居りました。

『やア間瀨氏！御登り召されい……』

と内藏助は聲を掛けますを、久太夫は莞爾いたして、

『先づ太夫殿より……今宵の總大將たる御身が當座の警護は年取つたれども拙者、態々殿に殘り申したのでおぢやる。』

と云つて内藏助を梯子に押上げるやうにして、自分は其の屋上に達するのを見屆けて猶豫なく、老軀を起し勢ひ込んで輕々と攀ぢ登りました。此のうち逸りに逸る若殿原は寸時も踟躕ひ居らるべき、門

内に積雪あるこそ時にとつての幸ひなれと、ヒラリ〳〵と身を躍らして庭内に飛び下りる機會、屋上の雪は打寄する波の岩に碎けて散る如く壯觀を極める中に、此の手の指揮役たる原惣右衞門は、一家根の上に仁王立、少しの油斷なく一隊の指揮を爲しながら、月明に乘じて邸内を展望しつゝ、一歩々々と脛を沒するばかりの積雪を踏占め〳〵人々を勵まして居りまする。

大高源五は門際の塀を足溜りに下りる、年は取つても壯者に劣らぬ元氣の老人、堀部彌兵衞は槍を杖に滑る足下踏占めながら、源五に續いて塀際より下りんといたしまする、ツルリ滑つたら忽ち素轉撞と落ちる危さ、源五見るより聲を掛け、

『堀部氏、御遠慮は無用！拙者の肩を足場に　　』

と塀際に立つて肩に足を掛けさせ、抱き下しまする。彌兵衞は無事に下りて

『いかい御厄介を掛け申しました。』

『相身互でおぢやるわ。』

と斯る中でも友誼に強く禮義を重んずるは、奥床しき處でございませう。

神崎與五郎と貝賀彌左衞門とは、屋の棟にあつて内藏助久太夫の上り終るを見るや梯子を内庭に下さんと往來の方より引揚げまして、長屋の棟まで持揚げたところ、唯さへ足場の惡い家根の上、お負に尺餘も雪が積つて居るのですから、ツルリ神崎與五郎足踏み滑らすと其のまゝ、トヾトウと雪諸共に轉げ墮る、あゝ神崎がと傍にゐた同志が助けんとしましたが間に合ません。見事地上へ投げ落されし腰の骨したゝかに撲ちましたが、素より英雄でもあり且つ氣の張り切てゐる時であるから、直ぐ飛び起きて元氣いよ〳〵熾でございます。貝賀彌左衞門もこの餘波を喰つて既に、梯子と共に墜落せん

と致しましたが、梯子が滑り落るとき雪を掻き寄せたる上へザクリと立ち、自然に屋根より内庭へ掛りましたので、怪我もせず只一寸吃驚したのみで……其の儘駈け下ります。原惣右衞門はこの混雑を制しつゝ、じものと先を爭ふて下ります。續いて殘る人々も我後れ邸内の擧動に目を配り足下の注意が怠つたものか、ツルリ滑つたので踏占めやうとしましたが最う駄目、その儘ツル〳〵ツルと止途なく、屋根より滑り落ちて手足に擦過傷をしました。けれども此樣傷や少々痛い位の事で驚くやうな人物でない、直ぐ傍にゐる朋手が立寄つて扶け起さうとするを、

『イヤお構ひやるな……大丈夫でおぢやる……』

と平然として威容を繕ひ雪を拂ひまするうちに、追々と此の手の二十三人皆恙なく下り、大手の木門は誰一人抵抗ものなく易々と乗越え、内庭は譯なく占領し了りました。然らば是れより豫定の行動に出んと、大石内藏助は一隊の點檢を致しますれば、行裝を異にした三人の侍、天晴衆に優れし骨柄で股立高々と取り、悠然と背後に控へをるを目早く認め、敵の窺ふにしては餘りに沈着過ぎた振舞、何者なるかと月に透して見れば、這は如何に一味徒黨の爲めに力を添へる、一族の大石三平と他の二人は堀部彌兵衞の甥なる堀部九十郎、佐藤條右衞門でございます。内藏助扨てはと三人の心を察しましたので、

『方々の御志千萬忝く存じ申すが、我れ〳〵亡君の讐を復するに、方々の御加勢を受けたとあつては、上へ對しても名分が立ち申さぬ……何卒この場限りお手出しだけは固くお控へ下されい。』

と判然言ひ切りましたに、三人は顔を見合せてホット息をつき大石三平は

『はゝア御尤ものお言葉……拙者は今宵のお催しに感じ、及ばずな

からと存じ申して、却て御妨げを致しておぢやる。』

と云ふ語のまだ終らざるに、堀部九十郎は肩を怒らしまして、

『我々とても餘りの御壯擧に感奮いたし、お跡を慕ふて一臂の御加勢をいたさんと存じて……のう、伊藤氏……』

と言ひますと伊藤條右衞門は首肯き、

『只今堀部氏の申されておぢやる如く、餘りお立派なる企ての羨ましく存じ、兩刀帶する身の果報に、切て御加勢を……』

と挨拶いたすを、内藏助も慇懃に

『方々の御心入一段と忝うおぢるが此の場合の儀をお察し下されい。』

と理の當然なる言葉に、それでもと押て言ひかね、三人は口を揃へまして、

『さらば、後刻再びお目に掛り申さう。慮外ながら御油斷なく御本望を遂げさせられい……』

『後々までのお心遣ひ執着におぢやる。』

と内藏助が會釋いたすを聽き捨て、潛り門より門外へ出て去りましたが、其の儘立ち去るやうな薄志弱行の人々でありませんから、三人は申し合せ夜の明けて、同盟の義志が吉良家を引揚げるまで、邸の外を警戒いたして居つたと云ふことでございます。是等は實に四十七士の行爲に感奮して、其の蔭ながら素懷を達せしめんと盡した得難き眞誠の侍、若し是れが赤穗の藩士でございましたら、共に討入つて目覺しき働きをした事であらうと、奥床しい氣がいたします。

さア是れからがいよ〳〵大活動の序開きと成るので、劒戟相映じ腥風襲ひ來るの活劇、千歳にその名の朽ずして懦夫も睡りを覺す、光景は果して如何ならん。

七　邸内の狼狽

二十餘人の同勢が梯子を掛けて家根へ登り門内へ下りるのでございますから、如何に静かに致したとて物音のしない筈はありません。況て四邊森々とした午前四時といふ時刻、天井裏で鼠がガタリと遣つても、大抵の者なら目の覺める時分で、此の夜はお客があつて幾干夜を更して寢たと云つても、グット寢込んだ寢入り端ではございませんから、表門の番人足輕森半左衞門は尋常ならぬ音、家根でヅシリ〳〵と怪しい音がする、ドタ〳〵と家根から大きな物の落ちるけたゝましい響きがする、函番を抱寢の床も凍る曉天の寒さには、家根の雪が解けて墜ちるも不思議と、頭を擡げて耳欹てますれば、ます〳〵怪しきは多勢の人聲、こは容易ならぬと先づ胸を躍らして、同僚の權十郎に聲をかけまする、

『權十、何だか變な樣子ぢやねえか。』

『おゝ、御門前でもないやうぢやなア、又お長屋の衆が喰ひ醉つての口論ぢやあるめえか……』

『いや、左樣ぢやあるめえ、下番の八太夫を起して見せにやアなるめえ。』

と半左衞門は、起き出でまして

『八太夫、八太夫……』

と呼起して置いて、戸の隙間より窺ひまするとと、火事裝束に身を固めました大勢が、鞘を拂つた槍を小脇に搔込むもあり、拔刀引提げて突立つもあり、事態容易ならざれば氣も轉動するばかりに驚き狼狽へ、寢室へ取つて返すや、寢衣を着替る間もなく、一刀摑んで、

『權十、一大事が起つた、猶豫する時でないぞ。』

と半左衞門は殊勝にも門番所より飛び出して奥へ注進せんと、東組

の一手で今一斑の人數が玄關へ推參せんとする前を横切りました。

目早く原惣右衞門は

『ソレ引捉へよ。』

と下知するや、半左衞門は一刀スラリと拔いて協はぬまでもと身構ました。第二斑にあるところの横川勘平、えいの一聲に唯だ一突き！　撞と倒れて雪を血汐に染め成せる、今宵の血祭に脆くも忠死を遂げました。續いて半左衞門に勵まされ、寢惚眼で飛び出した權十郎と下番の八太夫は、忽ち取つて押へられ抵抗する勇氣もなく、高手小手に縛りあげられて目を白黑するばかり。

この時大石内藏助は、一聲下知を傳へまするや、一同哄然喊聲をあげ火事よ〳〵と騷ぎ立てると西組もこれに應じて、ワット聲をあげて同じく火事よ〳〵と喚き叫びます。是に於いて第一斑に列する、片岡源五右衞門、富森助右衞門、武林唯七、奥田孫太夫、矢田五郎

右衞門、勝田新左衞門、吉田澤右衞門、岡島八十右衞門、小野寺幸右衞門の九人はバラ〳〵と表玄關に掛ります。玄關眞正面には早くも彼の竿の頭に括りつけて持參する處の一黨の宣言書、四十七人連名いたした『淺野内匠頭家來口上書』が立てらる、是れは申すまでもなく公儀の役人檢視に來るとき、同盟の義士が夜襲の素志本懷を明かにせんとの用意に出たものでございます。

また第二斑に屬しまする、早水藤左衞門、神崎與五郎、矢頭右衞門七、大高源五、近松勘六、間十次郎六人の一手は、門内と奥庭との堺の塀を打壞して、火事よ〳〵と口々に叫びつゝ邸内に躍り入りましたから、吉良の邸では赤穗の遺臣が復讐に討入たとは思ふものなく、全く邸うちより火を失したものと心得て熟睡の夢を破り寢耳に水の大騷ぎ、ガタ〳〵と雨戸を開けて寢惚眼を擦るものもございまする。遽に騷ぎ立つ體に見えますので、大石内藏助は聲を勵まし

て

『出會ものは誰れ彼れの用捨なく擊つて捨てよ。遁るものを追ふて無益の殺生するに及ばず。目指すは上野介殿一人なるぞ、組々は仲間を扶けあひ、手に立つ敵を斬拂ひ、時を移さず本望を遂げい、油斷して不覺を取るな……』

と下知すれば、指揮役たる原惣右衞門も右に廻り左に巡りて、

『三十人組は庭へ踏みこみ手に立つものは、片ッ端より斬つて斃せ……五十人組は長屋より出る者を用捨なく突き伏せい。』

と聲を嗄し進め〳〵と鋭く下知を致して如何にも大勢の討て入りた る如く見せかけ、その狼狽を利用して牽制せんと圖りまする。側面から敵を驅除せんとする第二の一手はます〳〵火事よ〳〵と絶叫して、邸内の人を驚かしつゝ室外に誘ひ出して搜索を便にし、易々怨敵たる上野介を討て首級を揚げんと、東西兩組が相呼應して盛んに煽り立てましたから、一層吉良邸の人々は周章ふためき、火事といふ聲を聞くや駕籠舁の兵左衞門、馬屋の者吉右衞門が仲間部屋より飛び出まして、

『火事だ〳〵と騒ぎあがッたッて、何處にも火の手が揚がつて居ねえや、笑かせあがらア面白くもねえ……』

と馬屋者の吉右衞門はキョロ〳〵して居る、駕籠舁の兵左衞門も寢惚たやうな欠伸をしながら、

『おゝ寒い〳〵、火事も何もねえに此の仰山な騒ぎ方ア、受取れねえなア……』

と云つて是れも茫然突立つて居りますと、火事だ〳〵だお出會なされと叫ぶ聲がする。

『吉右衞、彼方だ……』

と云つて夢中で駈出す兵左衞門に、續いて吉右衞門もバタ〳〵と走

り出し、丸の中に左文字で『ち』の字を印た三人組、大高源五、近松勘六、間十次郎の一組に眞驀、トンと衝突しましたから堪まりません。唯だエイの一聲にヅバリ斬り付けられ、ワット云ひさま尻餅搗いて撞と倒れました。年若でもあり逸り切つた間十次郎は、再び槍取直して突きするゑんと致しまするを、

『間氏、左樣な端た者を殺すも無益の殺生でおぢやる……其の儘捨て置かれい。』

と大高源五は制しますを、近松勘六も

『手向ひいたす程の物でもおぢやらぬ……さア參らう。』

と言ひまする、間十次郎も微笑みつゝ、四邊へ心を配りながら、火事だ〳〵お出會なされを連呼して行き過ぎまする。

如何に寢坊の者でも斯う騷ぎ立てられては眼が覺ずに居られません。お邸内に火事があるそれ起きよと、長屋住居をいたす面々は勢ひよく跳起き、寢衣姿の丸腰で戸外へ飛び出すもございます。又はおッ取り刀で駈出るもございましたが、殊に南寄の長屋は二十八軒もあつて、茲には上杉家からの附人も住み、事ある時に一廉の防禦に備へあると豫て探偵も屆いて居ることで、東組には是等に備へる第四斑、卽ち遊撃隊の一手堀部彌兵衞、村松喜兵衞、岡野金右衞門、横川勘平、貝賀彌左衞門の五人が、眼を皿のやうに配つて、[illegible]い來たれとドキ〳〵光る太刀を引提げ、或は槍を横たへ出るものあれば、用捨なく討て取らんの構への怖ろしきに、臆病未練のものは戸外へ一旦飛び出しましても、此の體に吃驚仰天、再び戸内に駈込む折柄に敵を脅遏の矢幾筋、ヒユー〳〵と風を切つて飛び來るに膽を潰し、是りや何うぢや、火事場に征矢の飛んで來るは開闢以來ないこと、命あつての物種と内より確り雨戸押へても、怖いもの見度の人心、そつと節穴から戸外を覗くと、生憎にヒユーと云ふ凄い音

がして、パチリと上總戸射ぬいて立つ矢一筋、ワット叫んで尻居に倒れる機會に障子バッタリ、倒れる物音にまた吃驚して生たる心地なく、言甲斐なくもブル〳〵と慄えあがつて、雷鳴と間違へ桑原よ萬歳樂など唱へまするもあり、イヤハヤ是れでは吉良家の家來は埒もない臆病武士ばかりで、殆ど手に立つものは無かつたやうでございますが、其樣恥知らずの臆病武士ばかりの寄合でもない。中には隨分目覺しき働きを咄嗟の間にいたし忠死を遂げて、天晴の武士と稱された人もあるが、其の地位が好くなかつたので、美名も後世に傳はらずして空しく犬死に終りましたは、其の人々の爲めに今更氣の毒なやうな心地がいたしまする。

八　贅口御無用

さて此の夜弓を取つて敵の心膽を寒からしめたは、何人でございませうか。斯樣の室内戰に飛び道具を用ふるは卑怯至極の振舞であるなどゝ、種々の理窟を揑返した學者連も昔からありましたが、素より敵を矢衾にかけて射縮めやうと云ふ如き、そんな卑拙極まる策戰計劃では無かつた。正々堂々と敵の邸内へ乘込んで、怨み重なる仇を報いんとするに過ぎないのであるが、味方は四十七人の外續く後援者は無い、敵には十五萬石の大名上杉家の後援がある、殊に赤穂浪士の討入を氣遣つて之れに備へるため、上杉家より多くの附人が入込でゐるとの噂は專らあること、上杉家と吉良家の關係は切ても切れぬ間柄で、吉良の當主左兵衞義周は實に上杉彈正大弼綱憲の實子で、隱居の上野介義央は綱憲の實父でありますから、それ討入といふ場合には上杉家より加勢の人數を繰出し、吉良父子を助けんとするは其の關係上有り得べき事でございます。左樣なつたら何うでせう十五萬石の大名を對手にせねば成らぬ事となるので、奇兵を

以つ功を奏する手段に出づるこそ、一味徒黨の執るべき安全の策でございます。功を一舉に收めやうとするには、敵を牽制もしなければ成りません、又恐怖もさせねば成りません、周章狼狽の虚にも乘ぜねば成りません、是等は夜襲に奇兵を放つの方法で、兵家の常に習套する處であつて、決して卑怯な手段でなく、又未練な行道でも無いのでございますから、弓矢を用ひて敵を威嚇いたしたとて、是を批難するは迂遠な理窟で取るた足らぬ議論、この一事で義士を褒貶しやうとするは、甚だ度量のない遣り方で感服することは出來ません。何も今更屁理窟を立て青筋張るまでもなく、既に古來より定論のあることでございますから、其樣ことは拔きに致し、東組の一手でこの弓を射たものは誰れであつたかと申しますに、早水藤左衞門と神崎與五郎の兩人は、弓術にかけては天晴名譽の業者で、側面より敵を牽制して正面の玄關から討て入る同志に便宜を與ふる屈竟の役でございます。

一面には火事よ〳〵と騷ぎ立て、吉良の邸内にある人々に狼狽させ、吃驚して外戸へ駈け出すところへ、矢頃を量つてヒュー〳〵と射出しました。素より敵を射殺すといふ意志ではありません、威嚇して荒膽挫き吳れんの結構で、殊に日頃から精兵の射手と聞えたる早水藤左衞門、火事よ〳〵の叫びに誘はれて、あわて出る人影を透し見るより、弓に矢を番へて滿月のごとく引搾つて居りますから、ヒューと切つて發てば弦音高く虚空に響き、矢鳴はあたりに震ふて飛んで參ります。敵は思ひ設けぬ矢ひゞきに驚き惘てゝ右往左往に逃げ迷ひ、唯だ夢に走るやうな氣が致して、火事にしては變だなと氣の注く者はございましても、扨ては赤穗浪士の討入りと初めから覺つて主人大事と働かんとする傍輩はなく、譯なく遁げ延びる光景の憐れに見えました。

斯かる騒動に邸内は鼎の沸に異らず、吉良家の六勇士としていの一番に數へ擧げられて居るは小林平八郎、續いて鳥居利右衛門、清水一學、須藤與一右衛門、大須賀治部右衛門、左右田源八郎でございまして、殊に小林平八郎のごときは、只に芝居や講談または浪花節などで勇戰の狀が傳へられて、義士の討入といへば此の老武者を追想されますが、芝居や講談や浪花節ばかりでなく、江赤見聞記といふ義士の事蹟を比較的眞面目に書きました記錄にさへ、

上野介家來小林平八、鎗をひつさげ勢ひを振ひて、所々に鎗を合せ防ぎ候得共、あまたに打合候故、遂に討留る

とあつて、如何にも大に奮戰して義士の人々を惱めたやうに見えますが、實際を調べて見ると嘘の皮で詰らぬ死にざまをして居ります から、芝居や講釋ほど力瘤の入れやうのない、極意氣地のない案山子武士の如く思はれまするが、全體小林平八郎といふ人は、上杉家

よりの附人には違ひありません……が、同じ附人でも此度の事件に就て特に上杉家から參つて居るのでなく、萬治元年十二月に上野介が上杉彈正大弼綱勝の妹富子を娶りました時から、富子の附人として吉良家へ仕へたもので、元祿十五年の討入より四十五年前に最う來てゐたのでございます。それで年齢も赤穗記外傳などには四十三歳と麗々しく書いてありますが、是等は實に當にもならぬ茶羅ッぼこで、討入の時が四十三としますと萬治元年に上杉家と吉良家と緣組の整つた折は、平八郎はまだ生れて居ない事に成りませう。假に二十歳位で附人になつて來たとしますと、討入の當時は六十五六の老人でございます。

まア其樣なことは何うでも好いとして、平八郎は火事よ〳〵と人々の騷ぐ聲に目を覺しまして、扨ては邸内に火を失したと見えると、瓦破と跳起きて寢衣の儘で袴だけを着けながら耳を濟しまするとと、

容易ならぬ物音がする、是れは中々に火事どころの騒ぎでは無いやうである、一大事の出來にはあらざるかとおッ取刀で南寄の長屋より飛び出しますと、邸内には早や東組の一手がヒタ〳〵と込み入つて、表玄關では名乘をあげて闖入する聲が雷の如く、夜陰を破つて勇ましく聽える。皚々たる内庭の雪に月は照添ふて畫間のごとく、劒戟の光きらめきまして物々しい扮裝の幾人が、眼を配つて油斷のない光景が有り〳〵と認められますから、這は主人の大事と成つてけりと魂魄も身に沿ず、既や氣は呑まれて了ひましたが、聊かでも恥を知るものなら此の場合流石に逃げもされません。是りや大變最早とても表玄關より入ることは難し、南書院の妻戸口より一刻も早く奥へ入り、主人を落しまゐらせんものと、勝手知つたる事でございますから、樹の間塀際を縫ふやうして今や南書院前の塀際へ辿り附ふといたします時、平八郎が運命の盡くるところか忽ち姿を見現

され、

『待て！』

と一喝したる一手の二三人バラ〳〵と追ひ縋りまして、柄に手を掛ける間もあらせず、平八郎は哀れむべし、犇々と搦め捕れました。

斯うなつては如何に氣は丈夫でも手出しはならず、徒に不覺を悔むの外はありませんが、搦め捕つた岡野金右衞門、横川勘平、貝賀彌左衞門等は、月に透し見れば六十有餘で人品骨柄賤しからず、吉良の家臣中でも名ある一人と見て取りましたから、

『上野介殿のお居間は何所でおぢやる、案内されい！』

と引立てんとすれど動く氣色はなく、靜に頭をあげ、

『自分は下々の者、主人の居間など存じ申さず……』

と云つたまゝ頭を垂れました。横川勘平この體を見るより、ハッタと睨みつけ、

『默らつしやい、下々の者と言拔けんとて許しは置かれぬ、是れこの着物……』

と平八郎の着用する絹の衣類を指さしましたから、グット言葉に詰つて再び言逃れる口實がございませんで默つてゐる。

『上野介殿は御家來まで御有福でおぢやる、如何に御有福でもな、御目通りも叶はぬ下々の者が絹物を着ることは出來申すまじ……さア何うでおぢやる。』

と疊かけて詰られても一言一句の挨拶もしない。恥を知る武士では この答へは出來ますまい、彼れは啞となつた、最う死は覺悟したものゝ如くであります。ヂット睨み付けてゐました岡野金右衞門は堪まり兼ましたか、

『横川氏、彼樣の奴に贅口御無用！』

『いかにも……』

と答へると同時に扱く手槍の穂先、キラリ月に煌きました。

この事は大河原文書に『小林平八郎小屋より出で御門半戸口へ參り候處被搦捕、上野が居所案内せよと申候へども、平八儀下々に存不申と申候へば、下々が絹の衣類着るものかと、其儘首を討取候由、首見え不申候』とございます。大河原文書は米澤藩士大熊彌一右衞門が、討入の後本庄の吉良邸へ番に當てられ、其の見聞を元祿十五年十二月十八日附で、本國の大河原忠左衞門等へ送つた書でございますから、小林平八郎の一條はこれに據つて斯く斷案しました。

九　闇中の閃電

さて正面の玄關へ眞驀、突入いたしました片岡源五右衞門、富森助右衞門、武林唯七、奥田孫太夫、矢田五郎衞右門、勝田新左衞門

吉田澤右衞門、岡島八十右衞門、小野寺幸右衞門の九人は、口々に

『淺野内匠頭の家來上野介殿に主君の仇を報ぜんとて推參したり、尋常に出會つて勝負あれ、願ふは上野介殿のお首級なり、出會へ〳〵勝負〳〵』

と家鳴震動するばかりに叫びつゝ、戸を蹴破り打壞しまする音は、宛も百雷の一時に落來る如く、其の物凄きことは譬んやうもないほど……當夜宿直いたして居た當主左兵衞の中小姓、齋藤清左衞門、同じく近習天野定之丞、同じく取次齋藤十郎兵衞は、何れも玄關近くに居りましたから、眞ッ先にこの音を聞きつけ、スワ大變、噂に違はず赤穗の痩浪士ども押寄せたるとは推參なり、我れ〳〵此處にある上は易々奥へ踏みこますべきと、第一番に枕元に置いたる一刀引提げ躍り出しましたは、中小姓の齋藤清左衞門、

『狼藉者！』

と大喝して玄關へ斬つて出る。此方の九人組は猪口才なる支へ立て刃向ふからは容謝ならぬ、不愍ながら汝も主の道連覺悟せよやと片岡源五右衞門渡り合、一打二打いたすうちに、

『片岡氏、斯樣なものに支へられ暇取つては妨げ……我等もお手傳ひ申す。』

と二三人鋒鋩を揃へて打つてかゝる、一人の敵ですら扱ひかねて受太刀になる清左衞門、何條去年より鬱勃たる勇氣を包み、腕に險りを生ずる精鋭の士二人三人向ふに廻しては堪まるべき、打こむ太刀の亂れた折柄、エ、と一聲源五右衞門の斬て下した鋭い太刀先、外し損じて右の肩よりザクリ、清左衞門はあはれ血煙たつて撞と倒れる。

是れと同時に玄關に續く板敷の廊下より、物をも言はず唐突に斬つて掛る一人がございました。危く眼前へ閃く刀の電光を先に立ち

ました奥田孫太夫、ひらりと身を交し一歩退りて身構へる、續く矢田五郎右衛門、勝田新左衛門も、敵幾人斬つて出るか知れませんから、是れ等も開いて後背を壁にいたし油斷なく、敵の擧動に注意をしましたが、續くものもないやうでございますので、刀を執つては堀部安兵衛と共に名のある奥田孫太夫が、闇を透かしてエイと斬付ける、敵も中々油斷なく忽ちカチリと受け止めながら、刀を引くや其の儘鋭く打込んで參りますは殊勝な振舞。奥田孫太夫は靜に聲をかけ、

『各〳〵方は此處にお構ひなく……手間取つては大事の妨げ、何これしきの敵を斬つて捨て、各〳〵に續きお供申すに何程の手間隙入らう……』

と意氣昂りて勢ひ猛く斬り込まれ、敵はタヂ〳〵タヂ〳〵受太刀に扱ひ兼ねつゝ、猶ほ强情に奥へは入れじと必死の覺悟、狂氣のごとく薙立んとしますが、如何にせん對手は當時に名のある劍客奥田孫太夫でございます。到底も互角の勝負を爲すべき手腕でない、全然段違ひであるので既に二三箇所の手傷を負ひながら、怯まず奮鬪する勇氣は流石に武士、恥を知るところの致し方で見上た働きでございます。五郎右衛門も新左衛門も隙を窺ひ、奥へ乘込まんといたしましたが、一人の敵の爲めに支へられるやうな鹽梅で、左右なく進みかねまするとと云ふは、討入にはそれ〳〵約束があつて、互にその約束を固く守つて助けつ助けられつして、味方を損じないやうに三人を一手のうちの一組としてある。孫太夫、五郎右衛門、新左衛門は表玄關へ乘込みました九人、三組に分割してある一組で、左文字にて圍の中に假名で『に』の字を前立に戴く一團でございますから孫太夫が如何にお構ひなく奥へと言つたとて、其の儘御免と飛び込むのは約束に違ふ。

『奥田氏、御免！』

と一聲斷りましたは勝田新左衞門で、九尺柄の槍を手繰と見る間に雲間を走る電光に異ならず、ピカ〳〵としたと思ふうち敵の脇腹へヅブリ一本。只さへ傷手に我慢するところ是れでは最早力竭き、バツタリ倒れましては如何に氣は焦慮ても抵抗することが出來ません齒噛みをいたして起き上らんとするを後目にかけ、に組の三人は奥へと志して闖入いたしました。茲に必死の勇を振ひ兎も角もに組の三人を暫しでも支へた吉良方の勇士は、左兵衞の取次役なる齋藤十郎兵衞といふ立派な者でございました。

當夜非番であつて長屋に寢ねて居りました左兵衞の近習役新貝彌十郎は、偶に哄然あげた喊聲に夢を破り、頭をもたげ耳を濟ますと火事よ〳〵と云ふ聲がけたゝましく聞える、扨ては出火、お表から火を失したのか御隱居所から火が出たのかと、瓦破と跳起き帶引き締

まするうち、表玄關の方に當つて何事か罵り狂ふごとき大聲が聞える、續いて戸障子にても壞すかと思ふ音が、寂寥した夜の靜さを縫ふて凄い響きを腸へ沁みるやうに傳へまする。彌七郎は思はず眉を顰めまして袴を穿くもおそしと、股立高々と取つて一刀を掴むや戸外へ飛び出して見ますと、皎々と冴え切つた月夜の雪庭、點々と人影は黑く動いて右に左にうろ〳〵、殊に驚きましたは銘々白刄を拔くか、鞘を拂ふた槍を突くかして居るのが有々と認められますから、這は一大事となつてけり、火事どころの騷ぎにあらずと、狼狽惑ひながら何處から御殿に入らうと茫然立佇みます折、表玄關は左兵衞の中小姓左右田源八、同く料理方の小堀源五郎などが必死となつて、チヤン〳〵バラ〳〵と、斬合ふ音の凄い響きが、チヤリーンチヤリーンと聞え出したに彌七郎は夢中で表玄關へ馳付けました。

此方の一手は十分手配りが屆いて居りますから、長屋より飛び出

すものを防ぐ第四班に属する遊撃隊、手ぐすね引いて待掛ける網の中へ包まれたと同じことで、芝居ならやア〳〵と槍衾に進退谷まる處でございますが、實地の戰鬪になると。中々そんな優長な眞似はして居られません。ヅブリ一本急所へ突き込まれましたら最期、どんな英雄豪傑でも忽ち現世の名殘、葉末に溜る草の露、風に動ぎ落つれば脆く碎けて消ゆるに異ならず。況て同等の手腕前があつても仕懸るものと仕懸られるものとは大した損德がある、對等の勝負でも仕懸られるものは七分の損と云ふ程でございますに、斯樣な不意打に出會ましては、非凡な人間でない以上は慌ずに居られるものでない。新貝彌七郎の如きも先づ火事といふ叫び聲に驚き、飛び出して見ると最う斬結ぶ及物の音に再度吃驚して、夢中で玄關へ驅付ける狼狽たとき、氣が轉動して居りますから只焦慮ばかりで、玄關目掛けて駈け拔けんといたしまするを、遊撃隊の一人横合より槍にて太股へ一本お見舞しました。彌七郎はバッタリと雪の中へ轉びながら、氣が張つて居りましたか、其のまゝ勃然と起きあがるや、跋引きつゝ玄關口へ猶ほ駈け付けますを、年は取つても打物執つては壯者も及ばぬ手練の老武者、一黨中の年頭七十六歳の老人とは思はれぬほど、槍を構へてヒタ〳〵と走り寄り、エイと掛けたる氣合の一聲と諸共、槍の穗先は彌七郎の横腹へヅブリと芋刺し、グット刳つて引き拔く機會、聲も立て得ずバッタリ倒れて式臺へ片足かけた儘息が絶えました。之れを見てゐました原惣右衞門

『堀部氏、お見事でおぢやる……。』

と思はず聲を掛けますを彌兵衞老人、槍の穗先に滴る血汐を振ひつゝ微笑み

『年寄に相應した對手……餘り手耐へいたさぬのでな、藁人形を突くやうでおぢやるワ、うはハ、、、。』

と高笑ひをした。其の綽々として餘裕ある態度は、流石に手練のほど思はれて頼もしく見えました。

一〇　斷弦と折刀

表玄關より闖入いたした一手の一派『ほ組』の三人、吉田澤右衞門、岡島八十右衞門、小野寺幸右衞門は、八十右衞門の三十七歳を年頭にいたし、澤右衞門の二十八、幸右衞門の廿七といふ年配で、思慮も分別もあつて、少壯客氣にのみ逸る青年でありません、戰鬪員としては頗る適當の年頃、殊に三人とも武術に掛けては天晴の武夫でございますから、今しも奥田孫太夫、矢田五郎右衞門、勝田新左衞門の三人が、玄關へ斬て出たる吉良家の武士と渡り合ます隙に乘じ、板敷の廊下に出ますれば、壁を小楯に取つて寄らば斬つて捨んと身構る敵の姿を、茫然とした有明の燈火に認めました岡島八十右衞門は、聲をかけ、

『壁際に敵あり！』

と同志に注意しましたので、敵も不意を打て奇功を奏せんとした計策は破れ、最早適はぬと諦めましたかして、今や拭板の廊下へ一歩踏み出した小野寺幸右衞門を、唯だ一刀に眞二ッと勢ひ鋭く斬りつけました。幸右衞門は忽ちヒラリと身を替せて空を打たせる、敵は失錯たりと惘て再び斬り込むをカチリと受け止めたかと思ふ瞬間、エイと一喝したのが速いか、斬り込んだのが速かつたか、敵は高股ザクリと斬り落されて尻居に撞と轉がる機會、廣間の襖二枚バッタリ倒れましたは左兵衞の小姓天野定之丞でございます。

是れ等の隙に澤右衞門と八十右衞門は廣間へ踏みこんで居る。幸右衞門は後れたりと支へる敵を斬り捨にして、其の儘奥へ走り入りますと、廣間の床の間には十數張の弓が立て掛けてございました。

扨てこそと首肯豫て同志の人々が千辛萬苦を嘗めて探り出した吉良家の備への中に、萬一赤穂浪士の討入る事があつたら、矢衾にかけて射すくめる手段で、用心を嚴しくいたし、宿直のものにも射手を選び油斷なく警戒しつゝありとの報告もございましたから、幸右衞門は弦の掛つた弓の十數張并べあるに目を附けますと、同時に噂に違ぬ敵方の備へ斯くまで嚴重であつたか、今宵の狼狽は常に用意をした手筈を誤つたものと覺たり、君恩は泰山より重く一死は鴻毛より輕しと覺悟する我れ〳〵同盟の士、縱へ矢衾に掛けたりとて射すくめられて躊躇はせぬ。然りながら討て入る彼方より矢繼早やヒユー〳〵と射掛られては、如何なる豪傑も深傷淺傷に惱まさるゝは間のあたり、敵の狼狽て計略の手配狂ひしも天佑であらうと、心で喜びつゝ行き過ぎんとしましたが、又急に首肯いて引き返し床の間へヅカ〳〵と進み寄り、片ッ端より張つてある弓弦をバラリ〳〵と引

り拂へば、弦は唸りを生じて列ね返り弓は張りを絶れて轉覆し、急場の用に立ざるやうになし置き悠々と奥へ進みまするは、流石一黨の參謀總長とも云ふべき樞機を握り、大石内藏助と同居して今日の大望を劃策しました、小野寺十内の子息幸右衞門で、その注意は格別、萬一敵が味方を遣り過した後、豫ての手筈に心附き後方から、ドシ〳〵射立られては堪つたものでありません。それで弓弦を斷た當意卽妙の働きは後々まで感じぬものはなく、小野寺十内が自分の妻の丹女に當夜の事情を委しく書面に認め送りました手紙のうちにも、

――番人三人廣間で寢てゐたるが起きて立むかふ、一人を幸右衞門高股を切て落し切ふせ直に奥に入候、其床に弓立ならべあるを、幸右衞門奥へ切入さまに弓の弦をばら〳〵と切はらひて通り申候よしにて、是は兼て敵のかたに弓はやり射るもの多しと聞候ゆゑ

定めて内外より弓にてふせぎ申すべきまゝ其心得すべしと各〳〵内々云ひ合たるゆゑに、敵何方よりか起出て後より射掛らるべきと心付て、弦を切放して通りたるならんと、よく心付たるとて輕き事ながら其砌人々感じ申候――

とあるを見ても、親の血統をうけて如何に用意周到であつたかを推定することが出來まする。

表玄關より乘り込みました攻撃隊の一手は、既に廣間まで驅破つて猶ほ奥へと突進いたします。斯うなつては戸障子を蹴破る音が激しく響く、奥向に仕へまする侍女たちは勝手馴れたる邸内ながら、狼狽まはつて逃路を失ひ寢衣姿のだらしなく、彼方此方にうろ〳〵と氣も心も轉動いたして、斬結ぶ太刀音に魂魄も身に副はず、偶々薄闇き室の此方から逃げ出さんとすれば、壁や襖障子を小楯にとり闇にも煌く一刀振被つて、血走る眼に四邊を睨み息を殺して窺ふ狀の怖しく、敵か味方か黑白もわかぬに足は縮みて、ブル〳〵と顫ひ戰く身體の置きどころさへ無きに、不意に眼前へキラリと煌く刀の光りを浴せ掛けられましては、キャッと魂消る悲鳴をあげ、夢中で遁げ出すもあり、邸内は上を下へと揉みあひ、阿鼻叫喚、修羅の地獄といふものが現世にあるならば斯かる光景にやあらんと思はれまする。

室内攻撃隊の一手で『に組』の奥田孫太夫勝田新左衛門矢田五郎右衛門の三人は玄關に續く拭板の廊下を踏み鳴らし使者の間の戸障子を打壞して、闖入しましたが茲に手對ふ敵もございませんから、拭板の廊下を左に曲つて南書院の方へと踏み込で參ります。孫太夫と新左衛門は眞蟇に書院を目掛て油斷なく壁際を傳ひまして進む、矢田五郎右衛門は廊下を入つた右側の内玄關を警戒いたしましたので、前の二人より一歩後れて今や書院の次の間に入らうとする一刹

那、傍に身を隠して居た敵の一人、五郎右衛門を遣り過して置き、後背より不意打に真ッ二つになれと斬付けました。此の時五郎右衛門幸ひに喪甲を着て居りますので負傷もいたさず、

『卑怯者！』

と怒りの聲は鋭く一喝を呉れると共に身體を捻るよと見るうち、横薙りに掃ひました手練の太刀先避ける隙なく、敵は太股したゝかに斬り込まれ、アッと叫んで脚下にあります鐵の大火鉢の上へ仆れ、進退の自由を失ふて起き上ることも適はず、無意識に一刀を突出して恰も猶ほ抵抗する如く見えますので、五郎右衛門も小癪に障りましたか、

『まだ手向ひをるか……』

とハッタと睨みて打下す二の太刀に、斬りも斬つたりな、敵の胴腹を筒切りにいたした餘勢、鐵の火鉢をガチリと鋭く斬り付けました

から、鋒鋩下り五六寸の處より機會でポッキと折れる。五郎右衛門は苦笑をいたし

『ハ、ア、折れをつては仕方がない……是れでは戰ひも成るまい、汝の腰の物は我等確に借用いたす……』

と悠々と敵の刀を奪ひ取り、腰に殘る鞘までを拔きて自分の鞘と差替ました。

『用なき奴等の支へ立に暇取つた……』

と獨り呟きながら書院の方へと急ぎ馳せ入りました。此の敵は當時何者であつたか混亂の際で素より姓名の如きも知れませんだが、後に至つて左兵衛の近習祐筆役を勤める笠原長太郎といふ者であると知れました。

また此の刀の折れたことに就ては、他の同志と五郎右衛門が細川邸へお預に成つて居りますうち、堀内傳右衛門にも話ましたとかで

同人の書留おきし覺書には

――此度拙者指申し候刀は新身にて候、定て疵有之たるや、切先より五六寸下にて折れ申候、惣體其夜は内藏助兼て申付、三人組合申候、廣間より書院へ通り申候廊下の隅に何者か居候て、三人の跡へ拙者通り申候後より切懸候へ共、着込仕居候故、摺手も負不申候、其儘振歸り切付申候へば、初太刀に倒れ二の太刀を打候とき折申候、右の者の下に火鉢有之候處に倒れ申候、夫に打付候て折れたる物と存候、夫故相手の刀取候て指替申候――

とあります。他の諸書にも新刀の上に瑕にてもありしや、脆くも折れたので是非なく敵の差添を申し受け、取替たと申した事が書てございますから、勇猛の狀を形容した出鱈目の見て來たやうな嘘で無いことが知れて居ります。

一一　蒔繪の薙刀

吉良の當主左兵衞義周はまだ十九歳の青年で……火事よ〳〵と騷がしきに目を覺し頭をあげる時、玄關の方にあたつて尋常事ならぬ物音に驚きまして、瓦破と跳ね起きると同時に、隔の唐紙悶だしく押開けました用人の須藤與一右衞門、

『御前、御目覺でおちやりまするか、一大事……赤穗浪士が推參いたいておちやる……お支度〳〵。』

と下緒の手襷甲斐〳〵しく一刀提げて急立てる、その跡より續いて是れもおツ取刀に、股立取りながら火急の場合身分の輕きは御免なあれと、馳附け參りましたは宮石新兵衞といふ徒士でございます。

『火急の場合、此處は拙者如何にも支へ申さう、御用人にはお供いたいて片時も早くこの場を御避け召されい。』

と左兵衛の寢間の次の間に一刀を上段に振被つて、進み來るものやあると、溜の間の方を一心に窺つて居ります。此の左兵衛の寢間と申すは次の間と溜の間をおいて縁側を越ますと直ぐ南書院で……泊番でございました永松九郎兵衛、座敷當番の堀江勘兵衛などは殊勝にも斬つて出て、書院の方に當つては最う浪士の込入つたかして、カチリ〳〵白刃を合す音、戸障子のバタリ〳〵と倒れる響きが、手に取るやうに聞えて來た。

『お表の方は危險い御隱居所の方へ、いざお立退きを……』

と須藤與一右衛門が手を執らぬばかりに勸めまする。此の時裏門の方にも哄然喊聲が聞え、上野介の住居、隱居所の方にも凄き物音の反響を傳へまする。扨は前後より押込だものと見えたり、何れにしても一つに成り防禦せざれば不便と、早くも心を定めましたから、

『あれ、彼の物音では御隱居樣も御心許なうおぢやりまする……御親子一つに成つて鋭鋒をお避けなさるが急場の手段……與一右衛門御案内申さん……』

と左兵衛を諫め促しつゝ

『然らば宮石氏、この場は……』

『畏まつた！』

と宮石新兵衛には油斷なく、左兵衛を無事に立退さんと踏止まる。須藤與一右衛門は左兵衛の供をして隱居所の方へ避けんとしましたが、最うこの時は血腥い風が書院のあたりを吹いて居まして、玄關より突入した一手の勇士は組々に分れ、防ぐ吉良家の家臣は斬り立てて薙ぎ立てられて傷を被るもございます、又槍で突かれて倒れたまま起き上らないものもございました。

ろ組の一手三人のうち片岡源五右衛門、富森助右衛門の兩人は、既に書院より右を廻つて溜の間へ出ますと、茲には宮石新兵衛眼張

て奥へは一歩も遣らじと斬つて出る、富森助右衛門たゞ一打にと渡り合ましたが、新兵衛も白徒吉良家にあつて屈指の劍客と稱さるゝ男、芋や藁人形を斬つて捨るやうには參りません。打てば開き開けば打こんで來る一生懸命の働き、天晴腕に覺えのある武士で油斷がない、殊に壁や建具を後の小楯不意の横槍を用心する注意を見て取りました片岡源五右衛門

『味な支へ立するからは正しく當家の勇士と見えたり、一人の爲めに暇取つては妨げでおぢやる……打拂つて目指す敵の首級を一刻も早く擧ぐるがお互の望み……富森氏御免』

と聲をかけながら、鋭い太刀風唸りを生じて打て下す、宮石新兵衛も左右より豪敵を受けては、最早斬り死と覺悟の體勇ましく、一歩も退ず爭ふうちに、重傷輕傷を幾ケ所か受けて身は忽ち韓紅、それさへあるに書院の方より追々と踏込み來る樣子でございます。富森助右衛門は勇氣いよ〳〵加はり、エイと高く叫けんで打込む一刀流石の宮石新兵衛も受け損じ肩先深くバラリズン、血煙立てバッタリ其處に斃れました。

この時遲く彼の時速く、片岡源五右衛門は奥を目指して突入しました。此の間こそ左兵衛が寢間の次の間で、須藤與一右衛門が今や左兵衛を警護して、奥の方へ遁れんとする時でございますから、源五右衛門は飛鳥のごとく駈けこみ來ましたので、與一右衛門は茲ぞ主人の大事と一刀スラリ抜き放ち、

『痩浪人の分才で高家の歴々を騷がすとは無禮を知らざるか、狼藉者！』

と一喝して唯だ一打に眞甲微塵になれよと、勢ひこんで打て來る、此方も手練の源五右衛門ヒラリ身を交せて

『なにを此の期に及んでの囈言、覺悟いたせ！』

と斬つて掛るを受けつ流しつ、互に暫くは戰つて居りますうち、富森助右衞門が飛び込んで來ましたに、與一右衞門も源五右衞門一人ですら扱ひ兼てゐるところ、强敵二人までを相手の渡り合、その上左兵衞の身の上も氣遣はれますので、巧く引ッ外してと思ひますが、油斷をしたら自分は其の場で血煙りと葬られ、主人も同じ枕に殪れる恐れがございますから、彼れも中々老巧のもの二人を誘引て庭前に出で、切て主人左兵衞が此の場の危難を救はんものと殊勝にも咄嗟の間に心を定め、ヂリ、〳〵と後退りしつゝ緣際まで追詰られ、源五右衞門が打込むで來るを交さんとして、雨戸にドシリ身を持し掛る機會、雨戸の外れると共に內庭へ轉げ落ました。源五右衞門も透さずヒラリ飛び下りさま斬り付るを、與一右衞門も去る者でございます、身を起しながらガチリと受け留め、勃然と起き上つて身構へる早業は、敵ながらも天晴の働きに助右衞門も續いてヒラリ、庭前の雪を蹴立て二三合打合ましたが、此方は血氣の兩人が鋭い太刀先、到底も永く抵抗するは難いことで、與一右衞門は哀れ庭前の雪に血を灌ぎかけ、主人の前途を見屆け得ないで忠死を遂げました。

此の手の一人なる武林唯七は、南書院の緣側を迂回して當主左兵衞の居間とは知らず、眞一文字に飛び込むや、徒士の剛の者宮石新兵衞は奮鬪して殪され、吉良家の六勇士と後に稱されし須藤與一右衞門は今や內庭へ轉げ落ちた時で、左兵衞義周も流石一人で其の場を避けるも心ならず思ひましたか、薙刀引提げ居間へ取つて返した出合頭でございました。唯七は此處まで進み入るにまだ手に立ほどの敵に出會さず、腕は險つてモヂ〳〵する矢先、

『優しき若殿原よ、さア來い！』

と叫けんで一打二打脅して逃げれば夫れまでと、打てかゝれば薙刀を打ち振つて向ふ殊勝さ、抵抗者ならば敵は選ばぬ唯七、一二合仕

懸けてエイと激しく斬りこんだ一刀、薤刀を翳して危ふく受け留ましたが、劍先餘つて額際を掠めたに臆病風がゾット身に泌み渡りましたかして、殊勝な振舞何處へやら奮闘する勇氣も挫けて、薤刀カラリと投り出した儘に後を見せる卑怯の態度、唯七は

『卑怯者、返せ……』

と怒鳴りつゝ追擊に背後より一刀浴せかけましたが、今一寸小手が延びたらバラリズンと斬つて退ける處を、ホンの擦り傷負せたのみにて敵は這々の體に逃げ延るとき、身に數ケ所の傷を負ひ鮮血滴たるを物ともせず、勇氣凛々勢ひ込で飛び來る血氣の壯者一人、己れ眞ッ二つと鋭く斬つて下す危ふさ。唯七は人の足音に身を開くのと壯者の斬り込むのと間一髪の差で、空を打たせましたから壯者は焦慮て二の太刀打ちこむを、唯七は得たりや應と一歩退つてガチリと受け流し、直ぐ附入れば開いて支へ、引けば打込む中々修練の腕、唯七さては敵中屈指の劍客と覺えたり、斯る敵こそ手耐へあつて面白しと、十數合打合ひますうち敵は速くも身を交しつゝ一目散に逃げ去りました。然れど『出會者は打て捨よ、逃るゝものは見逃せ』とは今宵の軍律でございますから、唯七も追擊をせず無益の殺生するでもなしと、手腕の喰るを耐へて猶ほ奥へと進み入りましたが、夜明に人々の室内を調べます時、曩に捨てた薤刀は黑塗に蒔繪があつて金具に吉良家の定紋五七の桐を鏤めてあるからは、言ずと知れた左兵衛、それと知つたら逃しはせざりしにと、武林唯七地團駄踏で悔しがつたと申すは、左も有りさうなことでございます。夫れにまた此の時横合より打て掛り、左兵衛を無事に逃しましたのは、吉良の隱居上野介附の用人で、六勇士の一人鳥居利右衛門が當主の安否を氣遣ひ來ましての働きでございます。

一二　水音の反響

凍れる雪を蹂躙き、曉天の月を浴びながら、千載一遇の今宵を内庭にあつて、敵を驅馳いたす第二班の一手早水藤左衛門、神崎與五郎、矢頭右衛門七、大高源五、近松勘六、間十次郎の六人のうち、藤左衛門と與五郎は專ら弓を取つて長屋から放心ヒョッコリ頭を出す處を、ヒョウと射かけられ吃驚して首を縮めさする滑稽は、全然吹矢のお化で出たり引込だり、中には婆婆ッ氣を出して火事と心得無腰で飛んで出る鼻の柱、ヒューと掠めてヅブリ後へ矢の立に膽を潰し、ワット喚いて逃げ込むもあり、又出會頭に矢疵うけるもあり、側面から討て入る同士にヅブリと一突きされて尻餅つくもあれば、エイと斬り付られ輕傷に氣も狂亂し、筋斗打つて逃げるもありまして、長屋の腰拔武士は息を殺して逼塞する體でございますから、第四班の遊撃隊堀部彌兵衛、村松喜兵衛、岡野金右衛門、横川勘平、貝賀彌左衛門の五人が、大手の北の方に寄りました小さな新門の邊を固め、一ッには敵の邸外へ逃げ出すを防ぎ、また一ッには長屋の押へに備へが十分立ちましたから、第二班に屬する面々もそれ〴〵内庭へと込み入つて、將に表玄關より闖入したる九人と共に室内に躍り込んと勇氣勃々、宙を翔るごとくに内玄關に迫り寄りました。

吉良家隨一の剛の者として後世に其名を遺した山吉新八郎といふ武士がございます。この者は元祿三年四月左兵衛義周が、上杉家より養子に參つたとき附人として吉良家へ來た一人で左兵衛の中小姓……最も左兵衛の附人として米澤より來ましたは、山吉新八郎ばかりでありません、蓼沼平内といふものと二人でございましたが、蓼沼平内は翌元祿四年の五月に死去して居りますから、左兵衛の附人として古くより吉良家へ參つて居ましたは、新八郎であつて討入の

當夜も目覺しい働きを致し、天晴の手腕前を表して居ります。極月十四日は非番でございましたから山吉新八郎、多くは酒を嗜みませんが、何しろ前日の大雪で寒氣が甚だしい、一口やれるものなら何うしても、淡泊と湯豆腐か何かで一杯といふ日でございます。新八郎も深くは嗜みませんが寒さ凌ぎと晩酌に一陶を傾けて、明日は十五日の登城お供をして出ねばなりませぬから、この夜は早く眠に就きましたので、義士の面々が乘込みワット喊聲をあげ、火事よ〳〵と庭内を駈け廻ります時は、其の聲に驚きて枕を擧げ、戸外の樣子を窺ひゐると、火事よ〳〵といふ叫びは此方彼方に起つて、互に相呼應するものゝ如くにも思はれますので、新八郎は眉を顰めつゝ勃然と跳ねおき、先づ戸外の模樣を見た上と存じましたから、寢衣のまゝ小刀さへも提げませんで、長屋の戸をガラリと開け雪の中へ何の用意もなく、ポカリと飛び出しますると突然目前へピカリと煌く槍の穗先！

『無禮者！』

と叫んで一歩退り身に寸鐵も携へませんが、身構て向かうを透しますると、雪丸かせの蔭に火事裝束したる者、槍を扱いて突き掛らんとする擧動の尋常ならぬ風體に、是れはと先づ胸を躍らしながら、御殿の方に目を放つて火事は何處と見てあれど、火の手の擧がる處もなくて、早や騷擾を極める邸内の光景。さては一大事の出來せるよ、豫ての噂に違はず赤穗の浪士が討入りたると覺えたり、今こゝで不覺を取つては役にも立たぬ犬死同前と、新八郎は咄嗟の間に意を決しまして、チヤリ〳〵と後へ退れば、同じ火事裝束に身を固めました一人、また何れからか雪を蹴散して現れ出で、左右より槍をピタリと付けて突いて來るを、斯う仕懸られては爭つたら防ぐべき物なき無手の新八郎、到底も勝算がございません。右からも左から

も突き出す槍を彼方に交し此方に避け、漸うにして戸口まで退きました時こそ、ピユー〳〵と風を切て唸りを生ずる矢一筋飛び來つて入口の柱へヅブリ射込ました。是れに新八郎もギョットいたし敵には弓矢の準備整ひたるからは侮り難き備へ立あり、御兩所に萬一の事あつては我々の不面目、これに上越すことは無いと、片手を後へまはして開けおきました雨戸に手を掛けるより速く、身を交して内へ飛びこみさま、ピタリ戸を閉めホット一息つきました。

屋内に入る新八郎は及物を選ぶ暇もなく急ぎ手に觸る脇指引提げ、再び戸口に出て窺へば最う待懸る者も居らぬ樣子。占た、この機會に一刻も早く御殿へ急がんと、帶キリ〻と引締めて窃と雨戸を開け、戸外を透し見ますれば人の姿は失せて、太刀合す音の物凄く遠く響きますので、氣は焦慮れども途中で支へられて御殿へ入ることが出來ねば詮なしと、四邊へ心を配りながら月蔭を忍びつゝ、勝手知つたる庭内でございますから、彼方へ拔け此方へ潜つて稍と竹塀の下まで參つたが、幸ひに見咎める者もないので身輕く、塀を乘越半戸口を外し内に飛び込みました。茲は南書院の庭續きで、院前の塀で、今新八郎の飛び込んで來たのは左兵衛でございます。此處まで來れば最う大丈夫、許なしと、一散に居間の方へと庭傳ひ植沒する雪を踏みつけ蹴返して、ドン

この時東組の第二班、側面より手六人は既に内庭に込み入つて

だ同志と合體し、室内に闖入込み入つ

庭内にムラ〳〵と込み入つ

ち組の一人近松勘六は大

ドン〳〵遣つて參りま

つて行く一人がございい
着流しに小刀一本帶するが
も急ぎて此處まで來つたら
逃げ匿れする間とも思はれや
家には上杉家より多くの附人な
の取沙汰隱れなし、彼れの物腰体
正しく附人の一人なるに疑ひなし
蹴立てバラ〳〵と進み寄るを新八郎、立
の柄へ手をかけ寄らば一打ちと、デリ〳〵
寸隙の油斷もありません。其内より手腕に覺え
れもデリ、〳〵と詰寄りまして隙を窺ひ、眞甲よりエイと
り込むを、ヒラリと身を交しながら樹に隱つて來る早業に、勘
なく太股を遣られんとする處、新八郎の得物は脇指にて刀身短き爲

めに、僅に截着をかすりしばかりでございましたが、然れど勘六の
勇氣はます〳〵加はつて踏込み〳〵斬り結ぶ。新八郎は奮闘して雄
雄を決する心はない氣に掛るは左兵衛の身の上、まつた隱居上野介
の安否でございますから、此の場を斬り脫けて速く先づ左兵衛の居
間へと心急くまゝ、兎角に多くは勘六の斬り込むを受けつ流しつい
たして、段々と一歩〳〵御殿の方へ近寄らんと心掛けて、隙があつ
たら逃げ出さうと夫れのみに氣を配つて居りますが、勘六は退るに
從つていよ〳〵猛烈に踏込み〳〵、容赦なく浴せかけて參りますの
で、新八郎も逃れる隙が更になく段々と泉水の渚まで來た。雪はま
だ昨日ながらに積つて消えたところ無く、凍れる上に霜を置きまし
たから、照りそふ月の影は映り銀砂を蒔たやうにキラ〳〵と光輝き、
寒さは一層に皮膚を刺しますが、斬り結ぶ身はそんな事に頓着はあ
りません。エイと打ち下せばエイと受け流し、斯うなつては新八郎

も扱ふて脱れんとすることは難い、互に一上一下火花を散らして爭つて居りますうち、勘六は敵の打ち込んで來るをヒラリと交して、泉水の渚の石に足ふみ占ますると、凍つて居ましたから堪まりません。ツルリ滑つてザンブとばかり水音高く、池中へ落ちました。ハット思つて這ひ上らんといたしまするを、新八郎は覗きこむやうにして、一刀を頭上に加へた儘宙を飛ぶ如く奥殿さして駈け附けます。勘六は幸ひに兜を戴きゐましたので傷は受けず、泉水に落ちたとき手を突きて僅の負傷をいたしたまで……危ない處を逃れました。

一三　敵中の英雄

奮闘突擊は素より目的でありません山吉新八郎は對手が泉水に滑り落たので逃れる機會を得て、眞蔀御殿の方へ駈けつけて參りますと、今緣側へ上らんと致して居りました矢頭右衞門七、斯くと見るより忽ち身を捻り、好き敵こそ御參なれと太刀風鋭く斬り付けます。えゝ又邪魔な奴が現れたか面倒なり、斬り拂つて室内に上らんものと新八郎は、二三合渡り合ながら月光を透し見ると、まだ弱冠の一青年で……而も打込んで來る手練の腕前侮り難きに、踏込み〳〵斬り結びまするうち右衞門七如何に心は矢竹に逸りましても、敵は吉良家に名ある剛の者、ヂリ、〳〵と追詰められて退り凍れる雪に滑り、緣下のところへ尻餅つきて仆れる、哀れ新八郎の打ち下す一刀に刀の錆と成らんとする危きところ、遙にこの奮闘の體を見ました間十次郎、這は容易ならぬ敵の振舞かな、捨ておいては味方の名折れ、おゝ左樣ぢやと槍を扱いて一散走り、雪を蹴ちらしつゝ駈け來るや、新八郎が片手上段に振被つて斬り下す危き間一髪を容るゝ隙もなき場合、

『間十次郎これに在り、いざ尋常に勝負あれ』

と大喝し、獅子奮迅の勇を鼓し鋭く槍にて突いて掛りました。流石の新八郎も名乗掛られてヒヨイと振向きますと、穂先は最うその身に近づきゐますから、危く身を交し、

『なにを……小癪な……』

と前面の敵より横合の敵を防がんとする肋腹目がけて衝く十次郎の槍に空をつかし切つて落さんとしましたが、此方も年こそ若けれ、左失錯たりと新八郎が斬り下すころは最う手許へ繰込みさま、ヤツと衝いた二の槍の早業、拂ふ間なくして太股のあたりをヅブリ。この瞬間の爭ひに矢頭右衛門七は危いところを逃れ、瓦破と起きあがりて身構へ直し、一刀を青眼につけて一打にと詰め寄りまする。

山吉新八郎は一方には右衛門七の詰め寄るに油斷なく、一方には十次郎に衝き立られた太股の槍を確乎握つてグイと引き脱きまして、血汐の流るゝを物ともせず大童になつて、

『青二歳に仕留らるゝ山吉新八郎では無いワ小癪な手向ひ立て覺悟せよ。』

と怒りの聲、破鐘のやうに四邊へ響き渡り、右衛門七、十次郎を對手に猛虎のごとく暴れまはる、其の奮戰勇鬪には若手の兩人も扱ひかねて見えました。

近松勘六、間十次郎とち組の一手でございます、大高源五がこの夜の扮装見てあれば、裏も表も燃え立つばかり紅色の絹小袖を下着にいたし白木綿の袖印つけたる兩面黑の羽織を着、精巧の兜頭巾を戴きまして薙刀かと思はれます、乃廣の太刀引提げた武者振は如何なる天魔鬼神も之れには敵し難く見えました。源五も玄關より斬り込んだ一手と一團になつて、目指上野介の白髮首得んと庭續きに踏み入りますと、壯手の右衛門七と十次郎の兩人、必死の戰ひ今や闌でございます。殊に敵は中々の曲者と見えて、血氣の兩人も危しと

見て取りましたから、韋駄天の如く馳せ來たり薙刀のやうな大太刀振被つて、横合よりエイと斬り付け、袈裟がけに肋までもと思ひや、山吉新八郎飛び下つて僅に鋭き一刀避けた早業に、源五は扨てこそと猛然たる勢ひを以つて、隙もあらせず疊みかけたゝみ掛け斬り込んでまゐる。右衞門七、十次郎も剛勇の大高源五が助勢を得ましたので、勇氣はます〳〵加はり、左右に分れて奮然として躍り掛ります。新八郎いかに勇氣あり手腕は出來て居りましても、氣遣はれる主人の安否に心は焦慮てゐる上、また新手の强敵が一人增して激しく仕懸て參るので、進退谷つて漸く受太刀になりましたを、速くも見てとる源五は一層猛烈に、眞甲微塵になれと斬り付けて來るを、新八郎心得たりと受け流したつもりでも體を交す暇がございませんで、頭ばかりをちよいと横に曲ましたが、冴えきつた手腕と刀の重量に受留めかね、横鬢より口の際までスカリと斬り付けられたに、眼眩んでグラ〳〵と仆れた儘起き上ることが出來ません。源五は莞爾といたし

『目指は斯樣敵にあらず、各は捨置いて奥へ……』

と勵まして共に縁側へ飛びあがり、奥の間さして進み行きました。

山吉新八郎は唯昏々として我れにもあらず、夢のごとくに霎時倒れて居りましたが、やがて正氣がつきますと頰から顎へかけて滴る血汐を左の手にて拭ひ、汚れた手を積れる雪に塗りつけてヌックと立ち上り、キット奥の方に目を注ぎますれば、逃げ迷ふ女どもの泣き叫ぶ悲鳴が聞える、戸障子の壞れる音がバリ〳〵グワラ〳〵とするかと思へば、バタ〳〵ドタ〳〵と倒れる響きの間隙よりは、刄物で打ち合凄い音がカチーリカチーリと手に取るやうに耳を貫きますに胸を痛め、若殿左兵衞殿は如何にお在らん、お居間に當つて彼のけたゝましい音のするは……お身の上のほど氣遣はしと思ひますと、

疲れし身體も勇氣が滿ちて蹂躙く雪の處々、血汐に染る慘狀に目もくれず、緣際まで走り寄つて室內を窺へば、雨戸は蹴外されて庭前に散亂するもありますす、打壞されて緣側に殘骸を止むるもござりまして、見るも哀れな光景……思はず切齒を爲し、

『えゝ、遲かりしか殘念！』

と獨り悔み歎き、急いで左兵衞の寢間へ飛び込みましたが、有明の行燈薄ぼんやりと蟬脫殼、夜の具を照し、夜寒の風を防ぐ枕頭の金屏風時の名匠が丹精を凝した風俗繪に、炷物のかをり優しく匂ふばかりの美人すがたも、容赦なく土足に蹂躙されて、笑ましげなる顏も玉の腕も踏潰され、へし折らるゝ亂暴狼藉。噫仕損じたり、若殿のお行方は何處なるぞ、此の場にお姿の倒れ在さぬが切てもの心丈夫と、ホット人なき居間に佇立みて溜息をつく折柄、さッと吹き入る夜明の風に血腥さき香を送りますので、新八郎またも心にかゝる左兵衞の行方、大膽にも有明の行燈提げて次の間を見まするとり倒されるもの二人三人、四邊の狼藉なる狀を見ましても奮鬪激戰の跡は知れ、血は滾々として疊を潤すと云始末でございますから、左兵衞殿の前途いよ〳〵心許なく成つてまゐり、提げたる行燈下におくや奥へ進みましたが、再び取つて返し行燈の燈火をフッと吹き消し、其のまゝ勝手知つたる奥の座敷へと主君を慕ひ進み行くは、天晴吉良家の忠臣でございます。

豪氣の新八郎は左兵衞の居間を跡に二間三間、障子襖の倒れる中を勝手知つたることゝて、壁に副ふて奥の方へと進んでまゐりますと、雨戸は既に打壞されて開け放したる緣側に黑き人影、猶ほ奥を目指てスタ〳〵と進むを認めましたから、足音偸みて近々と寄り後背より、唯だ一打ちにと思ひましたが、忽ち體を沈めてガッチリ受け留め、一客堀内源太左衞門正春先生の

門下に其の人ありと聞え、堀部安兵衛と並び立つ奥田孫太夫でございますから、容易に不覺を取るやうな事はない。膝を突いたまゝ矢聲と共に横に拂つて來る早業は、中々に息を繼ぐ間もない程に早かつたが、新八郎とて數ヶ所の手傷に疲れて居るものゝさう脆くは斬られて了ひません。さッと開いて巧に鋒鋩を避けた。孫太夫は稀代の名手、殊に勇氣の充滿して炎々たる猛火のごとき今宵、何條猶豫のあるべき疊込んで、激しく打ちこんで來るに流石の新八郎も、ヂリ〳〵と後退りして受け太刀となつた時も時、うろ〳〵と此處へ巡り來ました勝田新左衛門、横ざまに一刀、不意を喰はしタヂ〳〵と成るところを二の太刀に右の肩よりバラリ、ズドーンと斃れて其の儘起き上ることが出來ません。忠臣藏の狂言や講談または浪花節の討入の場で大活動をいたしまする小林平八といふは、此の山吉新八郎の目覺しき働き振を大袈裟に吹聽したのでございます。最も小林平八郎といふ人物はあつたに違いない、又上杉家よりの附人にも違ひはありませんが、最う六十有餘歳の老人でもあり、討入の夜は飛び出すと直ぐ遣られて何の働きも致さずお負に首をチョン切られて了つて居るのでございます。夫れに此の人は不思議に豪かつたやうに傳へられて、全く吉良家隨一の剛の者である山吉新八郎の名を知る人の稀なるは遺憾な譯……實に人間の幸不幸と申すことは何にでも付いて廻るもので、特り山吉新八郎その人にのみ限つたことでございませんから、以て瞑すべしだ……

一四　西組の門破

東組の戰鬪は大分闌と相成り、奥深く入り込み血腥き風は邸内に吹きまくり、慘憺たる光景を現して一時前までの溫かき夢は、掌裏をかへす修羅の場阿鼻叫喚の聲と變りましたが、西組は如何な

る活動を開始いたしたでございませうか、是れより西組に移つて東西呼應して討入つた策戰計劃を明かに述べやうと思ひます。

東組は總員を四手に分つてございますが、西組は之れを三手に分て第一班の磯貝十郎左衞門、堀部安兵衞、[illegible]門、彤野十平次、赤埴源藏、菅谷半之丞、大石瀨左衞門、村松[illegible]門、寺坂吉右衞門の十人は、小玄關より仕懸て闖入する手配り。第二班に屬しますものは東組は六人であるのに西組には、大石主税、潮田又之丞、中村勘助、奥田貞右衞門、間瀨孫九郎、千馬三郎兵衞、茅野和助、木村岡右衞門、不破數右衞門、前原伊助の十一人、殆んど倍數の人と成つて居りますが是れ側面の警戒場所が廣いからで、裏門より右手の長屋七軒と、折曲つて南に建並ぶ二十八軒の長屋を牽制する結構でございました。又第三班は西組の司令部で、この手の大將吉田忠左衞門續いて小野寺十内、間喜兵衞の三人にいたしまして、裏門つゞきに北へ折曲つた五軒の長屋を監視する人員の配置で……遊撃隊をおきませんから三手に部署を定めて、堂々と裏門へ繰込んで來たのでございます。

西組の裏門へ肉薄するまでに途中に辻番所がございます。今堂々と敵の邸へ大ビラに仕懸ける一黨が、一ケ所位の辻番所は恐るゝに足りない、何うで辻番か何かで火鉢を抱へて坐睡りする老爺ども、生た老爺の捨どころとさへ云ふ程のもの、現代の交番とは大分趣が變つて居ります。併しです、幾干恐れるに足りないと申しましても、ワイ〳〵騒ぎ散らされたり、役人どもに報告いたしたり、或は上杉家へ御注進〳〵と出懸られては面倒でございますから、若し辻番所で彼れ是れしたら引縛つて了へと手筈はチャンと極つて二十餘人の同勢憚る處なく勇み進んで番所の前を通り拔んといたします。此の辻番は吉良家が自衞の爲めに設けたもので、裏門と並びました

南の角にあつて、屈竟な足輕を詰めさせ用心を嚴重にいたし、怠りなく警戒を續けて辻番から異變のあつた場合は、怒鳴ると直ぐ長屋へ通じる、長屋の者からは時を移さず役向に報じる事の出來る、所謂吉良家の見張所でございますから、坐睡りして居た足輕二人二十餘人の足音に寢惚眼を擦つて、ヒョイと外を見ますと、驚いたは何れも大袈裟の扮裝でございますから、棒おッ取つてバラ〳〵と馳せ出して來ました。此方では素より期して居ますこと、ソレと誰れが指揮するまでもなく。壯者連中がヅヽト進み寄りますを、

『何方でおぢやりまする』

と番人の棒突き立て、支へんとするを、忽ち取つて押へるや直ぐ高手小手の縛めに、足輕はいよ〳〵吃驚して呆れ返るを、鼻ッ先へ[illegible]キ〳〵する白刃を突き出し、

『聲を立て居つたら、是れこれを……』

と脅迫されましては意氣地なく顏色も土の如くになつてブル〳〵慄へて居る奴を、

『えゝ歩め！』

と索引き立て門前まで牽かれました。

裏門に達しまするや、ヒタ〳〵と詰め寄つて口々に火事だ〳〵と叫び、

『御開門……御開門！』

と頻りに呼び立てますので、裏門の當番で足輕小頭の大河内六郎左衞門といふもの、悶てゝ起き出で四邊キョロ〳〵見廻しましたが、お邸内より出火した樣子もない、又近くに火事のある體とも見受けませんから、變だなといふ感じが起ると、門外で火事よ〳〵と騒ぎつゝ開門を呼ぶは何者であらうか、一人や二人の人數でもない樣子は合點の行かぬことだと、門の間より透し見ると、嚴しく火事裝束

をした廿餘人が肅然と控へて居たに、火消役人とは思ひましたが夜中猥りに開門は出來ません。六郎左衛門は猶ほ火事も無いのにと不審に堪へないで、再び邸内を見廻して居りました。

搦め手へ詰め寄せた面々は火事と叫び開門と喚きましても、邸内は寂寞閑といたして、門番所でガタリ〳〵と音した位でございますから、便々と何時までも待つて居られたものでない、血氣に逸る壯者は幾度か打壞しに掛らんとしましたが、吉田忠左衛門は泰然自若として少しも騷ぎません。間喜兵衛老人膝行出て、

『小野寺氏、最早約束通りに』

『左樣、大手の人々も大方乘越えの手段附たでおぢやらう。』

と小野寺十内は吉田忠左衛門の方を見返りますると、忠左衛門は忽ち嚴かに下知を發し、

『ソレ掛れ！』

と言葉のまだ唇を出切らぬうちに、手ぐすね引いて待ち構へました三村次郎左衛門、脅力衆に勝れたは此樣時の一番掛けと、大木槌の柄に手が觸るゝや、恰も小槌を扱ふに異ならず、十分に振被つては力任せ、扉の眞中をドシン〳〵と打ち下します、堅牢な太い門に支へられて居る扉、こゝとて中々ヤワな構造方でなく、大木槌で二度三度毆りつけたッてビクともする樣な物でありません。大力の勇士が精神凝らしまして何の此の位な門……打壞さいで置かんや、焚噌は鴻門の會に鐵の門を破り、女伊達等にすら門破りに名を遺した板額あるに、何ぞ破れざることのあらん、如何に堅固に構へたればとて見よや人々、三村次郎左衛門の力の程を……と輕々大木槌を打ち振まして、猛烈に打て下しますとヅシリ、ミシ〳〵ミシといふ凄い音がして、扉の横木はボッキと折れ、一寸幾分かある扉の板は三尺四方も朽木の如くボロ〳〵に成つて摧かれ、門も長屋も一

度に顚覆るかと思はれるやうな怖ろしき震動で壁はバラ〳〵と落る羽目はフワ〳〵と釘離れがする。ソレ門は破れかけたり打壞せと、鉞振翳して杉野十平次は門のあたりを發止と斬り付けます、次郎左衞門も猶ほ勇氣を籠めてエイヤ〳〵と門目掛てまた二打三打、さすが堅固に造られました吉良家の裏門もグワラガラ〳〵〳〵ッと怖ろしい物音と共に一枚の扉は巖丈なる釘もぬけ四五間も飛んでバッタリ倒れる、ソレ門は開たぞと潮のごとく我れ先にと一齊に邸内へ飛び込みまする。また滅茶〳〵に破壞されました一枚の[illegible]は上の方ばかり拐り取つたやうに僅に殘り、下は殆ど粉微塵に[illegible]まひました。此の時迄門番所の傍で呆氣に取られ茫然としてゐた當夜の門番大河内六郎左衞門は急に正氣の付たやうに周章まはり、年に五兩のお足輕でも田樂豆腐と同じやうに二本さす身分、丸腰の儘ではと門番所に這ひ込んで一刀腰に打込み、門外へ逃げもせず奥殿へ駈付けんとする志は殊勝でございます。この時またも一黨は聲々に火事でおぢやるお出會召されと呼り〳〵いたし、一手、二手、三手と手配り通りに別れ、大石主税等の一手は長屋のものや出ると待ちたる處へ、大河内六郎左衞門が臺所の方より入る積りか、バラバラと突切りましたを、手近に居ました不破數右衞門、エッと拔打ちに門番の六郎左衞門はドタリと倒れウーンと參りました。

火事だ〳〵と聞いて飛び出した彌次馬は、吉良家の前に住つてゐまして永年贔屓になり、出入を致すところの仕立屋長右衞門、性來が些とあわて者と見えまして、火事といふ聲を聞くと火元を確める心もなく、お邸が騷がしいからと火事仕度に身を固め、鳶口肩に威勢よく戸外へ飛び出すと眞暮、裏門の打破られてあるも夢中で、火元は何處だ〳〵と言ひながら鳶口振廻して、一黨の中へ割込んで來たは正し〳〵抵抗するものと見えると、裏門を監視いたします間喜兵

衛、エイの一聲に脆くも仕立屋の亭主は斬り斃され、ウワーッと云つたを此の世の名殘に、意外傍杖を喰つて詰らぬ最期を遂げたものでございます。西組の第一番に血祭になつたは門番の六郎左衛門、當人の疵に就ては淺手としてあるが多いが、中々淺手ではありません討入から十日目に主人の死に殉して居ります。夫れから第二番に遣られたのが彌次馬で最も割を喰された仕立屋の長さんでございます。

一五　出し不申候

寢入端とは違ふた夜明に近い寅の刻、現今の午前四時でございますから、餘程の寢坊でない限りは。火事よ〳〵と騷ぎ立る聲に夢を破つて飛び起きませう。それに唯だ火事だと喚き叫ぶ[illegible]りません、大袈裟に裏門を打壞しての狼藉、先づ火事よ[illegible]

驚して寢惚眼を擦るとき、ドタリガタ〳〵の大騷動を知らずに居やう筈のないことで、吉良の邸を取圍んで居る長屋の家來ども、吃驚仰天して先づ一度は戸外へ飛び出しました。その中にも食祿百石を受けて年齡も四十と云へば分別盛りの家老、松原多仲は裏門脇の長屋に住つて居りましたから、討入の騷ぎも他の人々より幾干か早く知り、火事よ〳〵と怒鳴散らされて先づ驚き、寢床を勃然と起きるや、枕元に置いてあつた袴だけは急いで穿き紐を締めながら一刀の下緒を口に咬へて、アタフタ戸外へ出んとする時しも、ア、ラ怪しや裏門の方に中つて凄しき物音がいたし、障子にビリ〳〵と震動を與へましたので、扨ては火事と地震が一時に來たのかとまず〳〵惚て、夢のやうに戸外へ飛んで出るまでは、赤穗の遺臣が復讐の討入とは氣が注きません。多仲は戸外へ出てキョロ〳〵、火元は何處であらうかと、狐にでも魅まれたやうに、一刀は腰に帶び下緒を口に咬へ

たまゝで、股立高く取つて生臑を表し、甲斐〳〵しく突立まする。

この時裏門は既に破壊され、三手に分れた二十餘人の西組はヒタヒタと押入り、南側の長屋を押へる大石主税等十一人の面々は、勢ひこむで乘り込み、凍れる雪を蹴散らしてバラ〳〵と進み寄ります體に、松原多仲はます〳〵驚きあわて、這は一大事である、御隱居の御身の上こそ危ふけれ。いざとばかりに駈け拔けて御殿に達せんと殊勝にも、身構いたして逸散に數寄屋の方へ到らんとする折、ヒューと風を切つて飛んで來た矢一筋ヅブリ太股に立つ、アット叫んで多仲は前へ膝を突いて仆れた儘で、射込まれた矢を引き拔かうと矢柄へ手を掛け、下を向いて居ます處へ飛び込んで參つたのは、茅野和助……で木槌を振被つてエイヤと腦天から御見舞申されましたから、堪まつたものではありません、多仲はギャフンと參つて雪の中へ軀を埋め、息の根が止つてしまひました。

これを手始めに南側の長屋に住つて居ります、徒士の者で富田五左衞門は寢耳に水の火事騷ぎに吃驚いたし、寢衣のまゝで戸外へ飛んで出る、お隣の星八右衞門も同じく惱てくさつて走り出ましたから、

『火事は何處でおぢやらうな……』

『左樣、一向火元が見え居らんぢやが……何處でおぢやらう。』

と一言二言話て、おゝ寒い〳〵と慄へあがる時しも、バラ〳〵バラと駈付けて參るは火事裝束に身を固め、研ぎ濟ました一刀引ッ提げ、人觸るれば人をも斬らん、馬ふるれば馬をも斫りなん權幕の怖ろしきに、臆病者の奥の手で三十六計命あつての物種と、氣も魂魄も身に添ふ心地はせず、キャッと叫んで我が家へ遁込み、内から雨戸押へてブル〳〵慄へ戰くはイヤハヤ滑稽の譯でございます。

この兩人に續いて同長屋の若松新左衞門、近藤德兵衞、山下甚右

衞門などの面々も夢中でヒヨコリ〳〵と戸外へ飛出して見ると、火事などは何處にあるか知れず、マゴ〳〵するうちに風を切てヒユーと矢の飛んで來るに膽を冷し、ビクリと飛びあがる彼方から寒月に煌く白刃揮つて斬り立て薙立てらるゝに、いよ〳〵仰天して戸内へ轉がりこみ、心張棒の二三十本も持て來てくれと縮み上つて居ります。徒士ですらいざ鎌倉といふ場合に臨んで此樣風でございますから、一層身分の輕い足輕では隨分滑稽を演じた連中もあつたやうです。其の中で長谷宗兵衞と申す男は吉良家の足輕では天晴の腕自慢、木刀取つては時に若侍も降參させられ、悔しさうに參つたと云ふこともあるほどでございます。此の夜も火事よ〳〵と喚く聲が耳に入ると、瓦破と跳起きまする折も折、ヅシトと震動するやうに家が動き、外戸では裏門の方にあたつて哄然喊聲のやうな叫びが聞えました。宗兵衞ます〳〵驚きながら火事は確にお邸内、裏の方が騷がしいのを見ると御隱居のお住居であらうかと、帶引締て倉皇しく戸外へ飛出しますると、仲間の富永次郎左衞門もあたふた飛出しますれば、沼田佐左衞門もおゝ寒い〳〵と言ながら戸外へ出る、續いて磯六兵衞、花木市兵衞、鈴木杢右衞門、杉山傳兵衞なんてえ連中がとヨコ〳〵と出て來ます。

『宗兵衞さん、この騷ぎは何でおぢやらうのう……』

『ボヤであつたか知らん……ボヤにしては未だに……』

と云つてゐるうちにワツト言て潮のやうに大勢が込み入る、裏門の方はいよ〳〵容易ならぬ怪い叫び聲もする、キヤツ〳〵と大の男の魂消るやうな悲鳴も交りますから、宗兵衞は

『やア〳〵各〳〵方にもお覺悟召され、お家の一大事赤穗の奴原が仕懸てまゐつたものと覺えたり、お互に二本挿すからは武士の端しくれ、いざ……』

と云つて駈け出さうとする向ふより、此方の人影認めて二人の勇士槍先揃へて眞驀、その勢ひ破竹のごとくにして鋭く當るべからざるに、流石の宗兵衛先生まだ一太刀も合さぬうちから避易し、逃腰構へまする程でございます。其の他の人々は吃驚して了ひ、思ひおもひにコツ〳〵と蟹の穴へ潜りこむやうに逃込む、宗兵衛も進むで難に赴く勇氣は失て、四邊は隣家の礎六兵衛が居ますばかり、是れもそろ〳〵逃支度して居ります。

『六兵衛さん、斯うなつては多勢に無勢ぢや、寡は衆に敵し難い……』

『左様ぢや、また彼の跡からも……宗兵衛さん、私は丸腰ぢや御免……身に寸鐵なく強敵に仕懸んは、大石を抱いて淵に臨むが如しでな……』

と六兵衛はスタ〳〵長屋へ逃げ入らうとします。宗兵衛も心細くなつて來た、前からは一騎當千の勇士が勢ひ猛に押寄せる。最う堪らなく成りましたから、踵を返して我が家の軒下へ掛る機會に、脅迫の矢一筋ヒューと飛び來つて軒端を掠める時、槍の穂先を逆倒に懸列ねたるやうに、月光を宿して蒼白く光る氷柱を射拂ましたので、バラ〳〵と落ちる時生憎にも宗兵衛の襟にヒヤリ一個。

『ヤア、助けてくれ、遣られた……』

と撞と尻餅搗て首を押へますするに、隣へ入らうとして居た六兵衛、今敷居を跨ぐとき常に強がつて居る宗兵衛が、キャッと云つて仆れ助けてくれと弱い音を擧げたに吃驚し、全く隣家の宗兵衛は殺られて了つたことゝ思ひ、命辛々六兵衛は我が家へ轉げこみます。また宗兵衛も夢中で我が家か他人の家か辨へもなく這ひこみ、徐々と我れと我が頭を撫て見ますると、首をチョン斫られたと思つたに、チヤンと附て居ますので不思議な氣がする、首をくる〳〵回轉やうに

して見るが、大丈夫でございますから宗兵衛は勇氣が出て、内から確り戸を押へて居たと申します。是れは臆病風に吹き込まれた宗兵衛ばかりでない、歴々がこんな子供の喧嘩染た滑稽を演じたやうで、彼等の口上書の中にも

先に進み候者一人槍にて突れ申候故、先小屋に入申候得ば、外より戸を押へ出し不申候

とあります。そして此の外より戸を押へ出し申さずと云ふことが、頗る面白い遁辭で我れと我が怖しさの餘り戸を押へてゐたのを自白して居るやうなもので、問ふに落ず語るに落るとか云ふのが此處でございませうか。

此の手の組も裏門を破壞して邸内へ亂れ入りますと、直ぐ手配は整然として第二斑の大石主税等の側面牽制隊は、ワット叫んで進みましたから、吉良の長屋に住つてゐる連中の寢惚眼で、火事だと思つて飛出す頃は最う手が十分に廻つて居ました。

一六　壁脱の曲藝

晝を欺く曉天の月は漸く西の端に傾き、明の明星は光白く輝き、隙間もる風の身を切るやうに冷たさが染々感じられまする時、裏門を打破る凄き響きに驚いて目を覺しました表門番の足輕中里仁右衛門は、慌てゝ飛び起きますると其の儘長屋から飛んで出る。同じ表門の番人でございます是も足輕の丸山清左衛門、慌てくさつて飛び出る出會頭に、バッタリ突き當つた鉢合せに又吃驚仰天いたし、

『ヤア何奴だ！』

と仁右衛門が怒鳴つて腰の一刀に手を掛け身構へますれば、清左衛門もまた一歩退つて刀の柄を確と握り。

『貴樣こそ何奴、無禮をすると手は見せぬぞ……』

と威張ながら雙方月に透かして見ると、隣合つて居る朋輩、而も同じ表門に勤める仲間同士でございますから、

『ヤア貴様は仁右衞門だな。』

『さう云ふ其方は清左であつたか。』

『あゝ、周章ちやア怪我のもとぢや、此樣騒ぎの時は氣を落附ねえ……』

『己らア些とも慌てやしねえ……清左、貴樣が飛出して來ていやと云ふほど打附りあがるから、咎めて見度もならアな。』

と負惜みは云ひますものゝ、俄の騒ぎが何であるか知れません、火事だ〳〵といふ喚き叫ぶ聲はいたしても火の手も見えないので、仁右衞門はキヨロ〳〵する。

『己らより仁右衞、お前の方が餘ッ程慌ててるぞ。……火事だ……火事ッてが火の手も見えねえ、何處だらうなア。』

と清左衞門もキヨロ〳〵と四邊を見まはしまする中、表門の方に當つて哄然喊聲があがると、之れに應じて裏門の方でも哄然とあげる喊聲は、天地に震動いたし幾百人かの人數で一時に押寄せたかと思はれますので、兩人は驚きうろたへまして、

『清左、是りや容易の事ぢやねえ、あの聲は……』

『うむ、如何にも……ことに寄つたら、赤穗の奴等が……大將をな……』

『違えねえ……何にしても己らは表の御門番だ、出懸ずばなるめい。』

『さうだ！』

と兩人は表門の方へ一散に駈け附けまする。この時は最う東組の面〳〵は活動を開始いたし、表門近くには大石内藏助、間瀬久太夫の二人がゐて、原惣右衞門は玄關近くに進み指揮をして居る、遊軍の堀

部彌兵衛等の人々は小門の方を警戒して居りましたから、仁右衛門、清左衛門の兩人は支へる人なく御門近くまで駈けて參りました。餘りの騒ぎに氣は轉動してゐる、只一心に御門〳〵とばかり心掛て來たので、足下などに注意はいたしませんから、一歩先に進みました仁右衛門は、何物にか躓きバッタリ倒れまする、後より駈けて來る清左衛門も仆れた仁右衛門の上へ躓き轉び、ハット思つて見ると先に躓いたは死骸で、四邊は雪を血汐に染なして一面の唐紅でございますから、兩人とも起き上るとその儘またベッタリ尻餅ついて腰が立たず、怖々這ひ寄つて見ると今宵當番であつた同僚の森半右衛門最う息の根が止まつて殺されて居るに、ワット叫んだまゝベタ〳〵と我れから雪に身體を埋め、目ばかりパチクリして茫然と夢のやうな心地で精神は喪失して了ひました。

斬られたのでもなく氣絶したのでも無い、膽ッ玉を潰した蟬脱の殼も、寒風に吹き晒された雪埋では、身體も冷切つて血も凍つて了ふ兩人、丁度雪を搔き除けて積んだ片蔭になるので、討入の勇士に見出されなかつたのか、縱や認めましても腰拔を斬るは詮なし、逃る者は逐ふに及ばず、及向ふものは容赦するなの掟を守つて見ても見ぬ振に過ごしたか、危い生命を拾ひモヂ〳〵遣つて居りますうちに、清左衛門は全く正氣になりますと、是りや斯うして居られる場合でない、赤穗浪士に取つては君の仇と討入つて、御隠居上野樣に怨みを報いんと致しもしやうが、自分に取つては假令善にもあれ惡にもあれ、上野樣は大切の御主君である、その御主君の危急の瀬戸際を斯うして居るは恥知らず、此の騒ぎでは上杉樣へ注進する者のあるやなしやも知れず、さうぢや何も踏止まり白刃の中を潜りまはつて怪我するばかりが忠でもない義でもない。よし、我れは一番脱けがけの功名手柄せん、是れ危きを避ける安全の策であると考へつ

きましたは、此奴中々隅には置けぬ男でござります。清左衞門斯う腹がきまると、急に寒くなつて身體がゾク〳〵するを、身慄ひいたしながらヤッと氣張て腰を切らうとしますが、身體が雪に凍付いて了ひましたか容易に起きることが出來ませんから、漸う這ふやうにして積んである雪の此方より表門の方を透かし見ますと、二三人白及引提げ油斷なく四邊を警戒して居る體でございます。是れでは到底も表門から脱け出すことは出來ない、ア、困つたものだ折角の名案も空しくなるかと歎息して居りますると、彼方此方でピュー〳〵と呼子の笛が鳴ると、合圖と見えて門内を守つて居ました連中も追々に笛の音色を慕ふてスタ〳〵スタ〳〵と行つて了ひ、東雲の空は白み渡つて夜は正にほの〴〵と明方近く成りましたので、清左衞門はいよ〳〵心丈夫に相成り、這ひ出して參つても誰咎める者もないを幸ひ、勝手知つたる屋敷内でございますから、漸う往來へ脱け出しホット息をつき、日比谷に住まれます上杉の邸へ御注進〳〵で駈付けましたは、同僚の死骸を見て腰をぬかす程の臆病者には出來過ぎた殊勝な働きでございました。

これに反して後世まで臆病者よ意氣地なしよと笑はれ草になりましたは、百五十石取の家老齋藤宮内と百石取の同く家老左右田孫兵衞でございます。百五十石取といへば吉良家の家臣中高頭でもある家老でもある齋藤宮内なんどは分別あるべき筈、また主家の大切と見て取たら粉骨碎身の働きをいたして、日頃の恩顧に報ふべきが當然でございますのに、此の夜の騷ぎを聞きますと直ぐ縮みあがつて、戸外へ出る勇氣もなく、家の中に小くなつて屈んで居りましたが、夫れでも若しや押込で來はせぬかと生てる心地はしません、常に御家老樣の齋藤樣のと尊敬受ける身が、この有樣は何といつて好いでせうか呆れて物の言へない始末。斯うして居てもまだ安心が出來な

いので、何うか逃出さうといろ〳〵工夫を凝しましたが好智恵が出ません、戸外では喚き狂ふ聲がしまする、お邸の内でもありませうか幽に女の泣叫ぶ悲鳴が聞える、白刃で斬結ぶ凄い音がガチリ〳〵と腸へ刺すやうに響きまする、さア斯うなると臆病者の癖として最う起つても居ても、ヂットして居られませんので、困しい時の何とやら申して漸うない智恵を搾り出し、御家老様ともあらうものが何うでせう、身を護るための刀を壁を切り破る道具、一生懸命犬潜りほどの穴をあけ、ソット這ひ出して往來をキョロリ〳〵と見廻しましたが、幸ひ人の來る擧動もないに、齋藤宮内はヤット胸撫おろし先づ二ッない生命を取り留めたと、莞爾する足下にドタリと落ちた壁土、膽を潰して尻餅ドサリとつく鼻の先、同じく壁を切り破つた穴からニューと首が出たに、宮内はまた吃驚して逃げんとするを、這ひ出して來た同じ家老の左右田孫兵衞、

『齋藤氏ではおぢやらぬか……』

『さう言はるゝは左右田氏貴殿も壁脱の曲でござるか……。』

『イヤ、面目次第もないこの始末……』

と左右田孫兵衞が悄然ますを、宮内は耳元に差寄つて、

『それは相身互でおぢやる……拙者も實はな……ハ、ハ、、、』

『これは不思議言合したやうに……貴殿は是れより何れへ……』

『然ればでおぢやる、先傘屋三右衞門方へ落延びた上で……斯様の時は相談對手のあるが互の心丈夫、同行召されては如何でおぢやるな。』

『それは千萬辱ない、いざ御案内下されい。』

と兩家老は恥し氣もなく、向町なる傘屋の軒へ立つと、内では向屋敷の吉良家でゴッタスッタ遣つてる騒ぎに目を覺し、表の潛戸が少し開きかけあるは天の與へと、宮内はガラリと開て飛び込みさま、

『三右衛どの、拙者共兩人を暫く賴む。』

と云ふ顏は、紛れもない吉良家の家老が二人揃ふて來たに吃驚し、まだ何の挨拶もせぬうちに、

『左右田氏、表の戸締を堅固に……』

『承知いたした。』

と孫兵衛はカチリと掛金かけて、上り框へドッサリ腰を下し、兩家老は互に顏を見合せてホット吐く溜息、虹のやうに火影に映りました。

一七　雪中の腥風

側面からの牽制運動は最も機敏に最も巧妙に行はれましたので、長屋に住居てゐる吉良の人々は周章狼狽の餘り、臆病武士の名を後世まで傳へる不甲斐なき惘て方をいたします中には、左樣臆病者ばかりも居りません。天晴の働きをいたして主君の難に殉しながら、其の立場の惡かづた爲めに可惜勇士も、吉良家の武士といへば一概に弱蟲のやうに思はしめ、臆病者の標本のやうに言囃されて居りますは殘念な譯で……是等の人々は地下に快く永眠することが出來ますまい。

第二斑に屬しまする牽制隊は三手に分れ、り組は大石主税、潮田又之丞、不破數右衛門、木村岡右衛門の四人、か組は中村勘助、奥田貞右衛門、間瀨孫九郎の三人、よ組は千馬三郎兵衛、茅野和助、間新六、前原伊助の四人で都合十一人でございますが、り組の一人不破數右衛門は他の人々の同盟とは些と毛色の變つた處があつて、當夜拔群の働きをいたしたも、素より据物斬の名人と云はれた手腕の覺えに、最後の花を咲かせましたのでございませう。全體この不破數右衛門といふ人は、岡野治太夫の子であつて不破家の養子、淺

野家に仕へて二百石を食み馬廻役を勤め、濱邊奉行を兼て居りました。數右衞門は元來豪放不羈の性質で、武勇も人に優れた豪傑でございますから、小節なコセ〳〵した事には拘らない、大度量な眞直な氣象であつて、常に佞人の大野九郎兵衞とは犬と猿の中、近頃になつては圭角が取れたものであるか、將た雙方とも意氣地が無くなつたのでせうか、犬の背中に猿を乘せて引張つて歩くを見掛けまするけれど、元祿時代の犬と猿は中々そんな融通の利くもので無かつたと見えまして、犬と猿と云へば名を言はなくとも大野九郎兵衞と不破數右衞門と符牒のやうになつて居た程で……此の不和が乘ぜられる一の原因とも成り、日頃の豪放から九郎兵衞の讒言で數右衞門は百日の閉門。是れは君命でございますから爭ふことが出來ず、謹愼をいたして百日經て出勤すると、根が正直一途の數右衞門は此度の閉門に就て不平滿々でございますから、默つて居ることが出來ませんで。素より身に犯した罪がないと信じて居ることで、遠慮なく上役に向つて抗議を試みますると、ます〳〵對手は機會を得て輪に輪を掛けて、讒言を構へましたから性質短慮の癖癖家、内匠頭は主命に反抗する不埒者とあつて永のお暇と成つたのは、内匠頭が癇癪玉を破裂させて上野介へ斬り付ける五六年前でございました。其の後主家の災厄を聞きて獨胸を痛めて居りますと、一日磯貝十郎左衞門に邂逅て往事を追懷いたし、亡國の感慨に堪へません處から、復讐の擧あるを聽きまするとと急に山科に大石内藏助を尋ね、心底をさらけ出し、誠忠無二の決心を示したので、内藏助の計ひにて冷光院殿の墓前に於て歸參を許され、此度の同盟に加名いたした譯……

斯かることから同盟に加はつた數右衞門、一層感奮して手腕の績かん限り働き、亡君尊靈が修羅の妄執を慰め奉らんと、當日の至るを待ち兼ねて居つたのでございます。處で極月は十四日の討入、自

分は西組にて裏門を打破り邸内へ入ると、牽制隊十一人の一人でり組に編制され大石主税、潮田又之丞、木村岡右衛門と一手に成つてワッと喚き叫んで突撃いたし、先不破數右衛門でございました。敵對する西組の血祭になつたは大河内六郎左衛門でございました。奴原は容赦なく斬つて棄てよ、逃る弱蟲は逐ふな、女小供は怪我さすなとは當夜の掟、牽制隊の旨趣は長屋より飛び出す者を御殿の内へ入れず、再び長屋へ追込みて玄關より斬つて入る同盟の勇士をして、活動を自由にさするが目的でございますから、東組にても西組にても第二班に屬しまする連中は、火事よ〳〵と怒鳴りながら一面は長屋のものを誘ひ出して荒膽挫ぐ結構で……飛んで出るやエイと煌く刃の電光、ピューと飛び來る矢の唸り、或は三十人組は西へ廻れ、五十人組は東へ進めとの虚勢に、數百人黨を組み力を協せて押寄せたものゝ如くに裝ひましたので、一旦長屋を飛び出した者も吃驚いたし、常に心得のある吉良家の侍は、先づ此の勢ひに氣を呑れて了ひまするが多く、物の役に立つべきものも狼狽の體で、示威運動で脅迫てかゝる奇策が功を奏し、大抵はタヂ〳〵と氣おくれがして勇氣も沮喪しました。

南側の長屋で取ッ付に住つて居ましたのは、徒士頭であつて中小姓を兼ねる杉山三左衛門とて、廿五歳の血氣の壯者でございます。裏門とは多くは離れて居ないところ、木槍で門を叩き毀す怖しい音に目を覺し、ハテ怪しからぬ物音と寢床を起き上ると同時に、火事といふ喚き聲、それに續いて哄然あげる喊聲に驚き騒ぎ、寢衣を着替る間などは到底もありませんから、其の儘袴だけは急いで穿くと突然枕元に置いた一刀引提げ、戸外へ飛び出して凍れる雪を素跣に踏み一散走りに驅けて來ました。此の時不破數右衛門の一手は既に勢ひ込んで亂れ入り、裏門より南へ西側の長屋の四軒目まで進み寄

るや、雪を蹴散らして驅け來る一人の壯者がございますので、數右衛門は眞先に仁王立となり、

『待て！』

と一喝いたしました。此の驅附け來たる男は杉山三左衛門で、今隱居所の急を察して奉公振見せるは此樣時と、內玄關より入る覺悟で息をも繼ず眞一文字に來るを塞がれ、危く數右衛門に衝當らんとしますを、其處は惘てゝ居ても侍、一歩退るや直ぐ刀の柄に手を掛けて身を構へ、

『待てとは奇怪なり……其方こそ何者！』

と竹篦返しに反問するさま、多少手耐へのありさうな擧動でありますから、數右衛門は落付拂ひ、

『おうさ、我れ〳〵こそは赤穗の遺臣、上野殿のお首級を貰ひ受けに參つておぢやるわ。』

『風聞にあつた赤穗の瘦浪人ども……推參なり、抽者が一刀受けて見よ。』

と云ふより早く拔き打ちに胴を斬らんとした。數右衛門も猶豫なく懸合せて三三合斬り結んだ、三左衛門いかに焦慮ばとて据物斬の名人と許される筋鐵の入うた手腕、同士中でも屈强の剛の者たる數右衛門の鋭き鋒鋩に敵すべき、三左衛門の斬り込んで來る太刀をヒラリ交せておき、エイと掛けた氣合諸共右の肩先より斜に斬て下しましたを、三左衛門早くもガチリと受けはしたが、力が足りなかつたか肩口二三寸斬付けられ、萎むところを二の太刀に横鬢そぎ取られてバッタリ仆れ、雪を血汐に染めまして血腥さい風が面へフーと吹き付ました。

この隙に大石主稅、潮田又之丞、木村岡右衛門は敵を追ひこみ又は追ひ散しズン〳〵と進みましたから、不破數右衛門も跡を追ふて

進む。二番手であるか組の中村勘助、奥田貞右衞門、間瀬孫九郎の三人は裏門に沿ふ長屋七軒の者の飛出さんとするを防ぎながら、追々に進んで參るとき丁度四軒目、不破數右衞門が今杉山三左衞門を斬り仆した前へ來ますと、甲斐〳〵しく四五人降積む雪を掻き除て通路を開けた片蔭から、衆を力に不意に拔き連れて斬てかゝる。えツ小癪な支へ立て、成らば對手にして見よと、當年二十有五歳で血氣壯な奥田貞右衞門、眞先に一刀振被つて斬つて入る、續いて間瀬孫九郎、中村勘助何とて猶豫いたすべき、孫九郎は槍を扱いて突てかゝる、勘助は刀を揮つて打て掛る其の勢ひの鋭きに、吉良家の處士が殊勝な振舞も忽ち挫けて、早や逃腰になるとき何處によりかヒュウ放つた矢一筋、風を切つて後の戸口に發止と立ましたので、彼等はいよ〳〵怖れ戰ぎ、抵抗ふ勇氣もなく屋内に逃げこみました。

『やア卑怯なり、出會〳〵。』

と聲かけながら孫九郎は槍の鐔にて、ドンと雨戸を敲きましたが、臆病風が立ては再び奮闘する氣力もなく、息を殺して又出るものもありませんので、斯かる敵は捨て置くとも妨げする憂ひもあるまいと、か組の三人も月を明りに進擊いたしまする。

一八　月下の紅雪

是れも南側二十八軒の長屋に住つて居りました清水團右衞門は、吉良家の分限帳に載てゐる處では取次役で、十五兩五人扶持とありますから、相應の役向を勤めて分別盛りの四十男……邸内の騒がしきに夢を破り、瓦破と跳ね起きて耳を濟しますると、彼方でも此方でも火事よ〳〵と叫ぶ聲がするかと思へば、悲鳴を擧げる物凄い叫びが腸へ泌るやうに聞えます。火事にしては騒ぎが甚だしい、如何なる椿事が出來したか、斯くては御殿の中も心許ないと、一刀腰

にぶち込むと其の儘雨戸開るも遲しと戸外へ飛んで出ましたが、積つた雪を掻き分けて幾筋かの道を造り、十四日の月は稍や西に傾きて婆娑たる影清く輝き、夜氣肅々として殺氣邸内に充滿し、四邊の光景平常に變つて物凄い。長屋〳〵の出口を掃き除けた雪の細道を縫ひ、油斷なく塀際まで忍び寄りました團右衛門は、尋常の入口より御殿に入らんとするには容易なことでない、非常の場合には非常の手段を回らすとも、一刻も速く御兩所樣の安否を知るが臣子の分である、逡巡して事を誤るに於いては何の詮もないことだと、塀を飛越して内庭より御隱居の居室へ至らんと、塀際に閑人がこさへた雪達磨炭團を眼球に枝炭を結んだ口、邸の騷ぎも何處に風が吹くかで濟まし顔で居ますは、是れ幸ひの足場とヒラリ飛び上り、忍び返しに手を掛け力任せに毀さうとして居りますを、牽制隊の三番手に屬します千馬三郎兵衛が遙にこの體を認めバラ〳〵と駈けて參り、

突然エイと高く叫んで斬て落さうと致しました。團右衛門も天晴心得のある武士でございますから、足を屈めヒラリと飛び下りさま、眞甲唐竹割と斬りつけて來る早卽の早業に、三郎兵衛は血煙立て倒れるかと思ひの外、身を沈めてチヤリンと受け留めながら、さッと身を開くよと見えましたが、電光石火と斬り立てゝ來る鋭き勢ひに團右衛門も二三合は、受太刀となつたが、忽ち備へを立直して猛虎の怒る如く、

『歴々のお邸へ推參して狼藉いたすとは、不埒千萬……容赦はせんぞ覺悟せよ。』

と鋭く打ちこむ太刀風に、三郎兵衛もクワッと滿面に朱を注ぎ、

『なにを小癪な……さア來い。』

と奔龍天を衝くの勢ひを現し、打てば開き開けば打ち、互に秘術を盡して爭鬪いたしましたが雌雄を決せず、三郎兵衛は焦慮てエイと

斬りこむをカチリと受け留め、引く刀に足を拂へば團右衞門は飛び上つて空を打せ、燕返しに直ぐエイと頭上を目掛て斬つて下すを、ヒラリ身を交して横撲りの一本には流石の强敵も、身體を捻り損じて薄傷を負ひましたので、いよ〳〵奮激突貫する勇氣の猛烈なるには、三郎兵衞も扱ひかねて二足三足タヂ〳〵と、後へ退る會機搔き除けた雪の小山に躓きバッタリ仆るゝを、團右衞門は得たりと乘り掛つて只だ一打ちと容赦なく打ち込來る、此方も去るもの轉びながらに身を滑らして巧に危難を逃れましたが、敵はこれに氣を得て激しく斬り込まれ、漸う惡戰に惱み居るを、同じよ組の茅野の和助が斯くと見るより宙を飛び、勢ひ猛烈に横合から斬り込んで來ました、團右衞門はまた精鋭の强敵を受けても、少しも萎む擧動なくますます奮闘血戰、勇氣更に衰ふる體もございませんで、三郎兵衞と和助を左右に引受け踏込み〳〵戰つて居りました。

間新六、前原伊助の兩人は、長屋より出でんとする敵を追込み〳〵して居りましたが、千葉三郎兵衞と茅野の和助が一人の敵に當つて奮闘するを見るより、バラ〳〵バラ〳〵と駈け寄り、新六聲をかけ

『御兩所、我れ等新手が入り替り申さん。』

と言ふより早く新進氣鋭の鋒鋩を受けて見よやとばかり割つて入ります。伊助も何とて躊躇いたしませう、

『天晴手錬の敵と見受けたり、いざ拙者が替りて……』

と眞正面より打ち込んで來た。團右衞門如何に勇猛なればとて、四人を一手に受けては堪まりません、衆寡敵せずで忽ち數ケ所の傷を被り身は朱に染み氣力も次第に衰へて、其の場へ仰さまに倒れて了ひました。

この時後にまた一人敵の現れ出で、背後より斬つてかゝるを、早くも氣の注きました前原伊助、咄嗟の間に身を捻り

『卑怯者！』

と一喝して刃を合す。敵は唯だ無二無三に斬り掛りまするさまは殆ど死物狂ひの體、見れば最早中々の年配で、袴の股立高く取り晒しの手拭にて鉢巻を確りなし、吉良家にて相當の身分ある者と見え、不意に起つた椿事に悠々是れだけの支度して斬つて出るは、餘程沈着家と察せられました。此の男は何者であるかと申せば、上野介の用人で祿高五十石を食みまする宮石所左衞門といふ、誰が極た相場でございませうか、人間の定命五十の坂も既に越て居るので、前原伊助はそんな人とは素より知りませんが、敵に取つて不足のない、一筋縄では往きさうもない剛の者と見て取り、好敵こそ御參なれ、二十餘ヶ月の間怨みを呑み腕を扼して待たる今宵、縱や對手は鬼神たりとも忠義の籠つた前原伊助宗房の一刀成らば受けて見よやと、強敵と見て勇氣いよ〳〵加はりまして、エイと烈しく打てかゝれば敵も油斷なく受け留める刃と刃、憂然として凄き音と共にパット火花が散る。伊助が打ちこむ二の太刀に敵は飛び退きましたが間に合はず、太股に一刀ザクリと挽き傷うけ、ヨロ〳〵と倒れかゝるを危く踏み占めて、再び死物ぐるひの奮戰をいたしますが、思つた程の剛の者ではなくて、一創を負ふたばかりで刀法の紊れを認めましたので、伊助は既に敵を威壓して踏込み〳〵追ひ詰め、また數ヶ所の傷を負せましたから、ます〳〵敵は勇氣も挫けタヂ〳〵と後退りしますうち、掻き除けたる雪に躓き足を滑らして、撞と倒れましたに强敵と思ひの外案外脆い、此の始末で伊助も張合脱のしたやうで、倒れる處を

『えい、支度ほどの奴でもない……』

と呟きながら、無益の殺生するでも無しと打ち捨ておき、雪を掻き上た小高き丘へ登りまして、月を明りに一手の所在を窺つて居りま

した。

南側二十八軒の長屋を警戒する任務を帶び、之れを片ッ端より物色して居りまする第二班の一手、大石主税、潮田又之丞、不破數右衛門、木村岡右衛門は、最う大抵出るほどの勇氣あるものは出で、此の騷ぎに腰を拔して縮みあがつた奴原は、息を殺して小さく成つて了ひましたかして、一時はワ[illegible]ぎ立た長屋の連中も寂寞となつたので、手持不沙汰で物足らぬ[illegible]いたし、室内に闖入した同志が羨ましく感じて居りましたが、勝[illegible]に斬つて入ることは出來ませんから、矢張彷徨〳〵として手腕のモヂ[illegible]るを忍び、少しは手耐へある敵の出で來たれと巡廻して居りました[illegible]ご寄手の擧動を窺つて居た、上野介の近習役では年頭五十五歳の[illegible]左衛門、當夜は非番で長屋に下つて休息して居りますと俄な大騷ぎ、火事よ〳〵と云ふ聲に吃驚して飛び出さうとすると、戸外は早やチヤン〳〵バラ〳〵が始つて居る。是れは火事どころの騷ぎでない、寄手の三十人組五十人組と張る虚勢に脅遏され、さては大層の人數である今駈け出しては、到底も御殿へ滿足に入ることは六ケ敷と、臆病風か身柱もとからゾクリ〳〵と泌みては、出る勇氣もないが夫れでも機會があつたら飛び出さうと、戸外の模樣を節穴より覗いてはブル〳〵ッと慄えあがり、首を縮めて奥へ逃げ込みましたが、氣に成るので又戸の節穴から覗いて居ますうち、戸外は大分寂寞いたして小屋前に人影も見えないやうに成つた。さア最う徐々出懸ても大丈夫だ、御隱居樣の所在さへ探し出して、怪我をせぬほどに働けば役目は濟むと、狡猾な考へを起して怖かな吃驚で戸外へソッと出たが、幸ひに人影も見えませんので、占た〳〵と前後に注意しながら、漸く五六間拔足さし足鷺の鮨でも踏みさうな擧動で來かゝる體を、目速く見附た潮田又之丞は、一手の跡を尾けて不意にバッサリ

遣つて退る手段と勘違ひいたしましたので、態と積雪の小高き蔭に身を潜めて待て居ります。加藤太左衞門は然る伏兵のあらうとは思ひも寄りません、素より今宵の寄手と奮闘して、主君に忠勤を擢やうといふ心でもありませんから、用心に用心してビク〳〵物で進んで來る小蔭より、潮田又之丞が前途にヌックと立塞がりました。斯うなつては太左衞門とてワツト逃出しもされず、一打ち二打ち白刃を交へましたが、忽ち擦過傷一ヶ所負されると、最うとても爭ふ勇氣どころの騷ぎでなく、懸替のない膽ッ玉を潰して奥の手の三十六計、スタ〳〵と何處へか姿を隱して了ひます。

『ア、好年齢をしながら恥を知らぬ臆病者ばかりぢや。』

と又之丞は微笑みまするとを打ち、血腥い臭氣がプーンと立ちました。冴え切る月を研ぐやうな風がサツト面

一九　氣轉の火影

月明に乘じまして、裏門を譯なく打ち破つた西組の一隊で第一斑の屋内へ突擊する一手は、豫て手筈の定まつて居ることでございますから、霜に凍た雪を蹂躙きバラ〳〵と小玄關へ駈け附け、大力の三村次郎左衞門は木槌を引提げたまゝ、ヅカ〳〵と玄關の式臺に跳りあがるや門を破つた餘勢猶ほ去らず、玄關の戸を力に任せてエイヤの聲諸共、只だ一擊に破壞し呉れんと撲りましたから、如何に堅牢に出來て居たとて、鐵骨鐵板を以て作つたものではなく、素より の板戸、大力の次郎左衞門が二年越しに抱く遺恨の霧らしどきと、木槌を揮つて撲り附けたのでございますもの……忽ちガラガラ〳〵ッ、バリ〳〵バリ〳〵、ドタンバタンと激しい音がいたし、戸も障子も一所に眞中より捻折れて了ひ、玄關の戸締……第一の關門は只

だの一撃に脆く破れましたのを見て、此の手の人々哄然喊聲をあげ、式臺の板踏み鳴らしながら、菅谷半之丞大音聲にて

『赤穂の遺臣内匠頭の意志を繼ぎ、上野介殿の御首級所望の爲め推參せり、いざ見參々々！』

と叫びますれば、其の聲天地に響き家鳴震動して邸中の夢を驚かしました。

玄關の戸障子を打ち壞して此の手一組が闖入しました時、牽制隊の一部は既に火事よ火事よと喚き狂ふて、邸内の人々を脅かします、内外相應じた手配は東西兩組ともに遺憾なく實行された。玄關から亂れ入りました豪傑は、何れ劣らぬ一騎當千の英雄でございますが勝手は知らぬ室内ではある上に、眞闇黑で何處に敵の潜み居るやも知れませぬ。只だ僅に逃げ出す足音や叫び騷ぐ聲を力に暗索の光景で、誠に不便極まり放心與深く踏み込み兼ねました。この

體を見て取りまして磯貝十郎左衞門は年は漸く二十四歳、血氣壯のものでございますが、性質機敏な男、何をするにも斯う眞闇黑では此の上もない不便である、是れでは味方の損、敵は案内知つたる自分の屋敷内、逃げ匿れますには屈竟の都合であるから、何うかして燈火をつけて働きの掛引を便にせざれば、折角幾層の艱難を嘗め辛苦を忍びて、今夜優曇華の花咲く機會を得ながらも、肝腎の上野介を逸し去りては甲斐なし、何奴なりと手捕にして蠟燭を點けるは味方が目前の便利、勇氣を加へる唯一の手段であらうと、早くも胸中に描く劃策を實行せんものと、獨大膽にも臺所と思ひまする邊へノソリ〳〵と遣つて參ると、一室に茫然有明の燈火が映して居りますから、十郎左衞門突然障子を蹴破りヌット中へ入ると、蒲團を頭から被つてブル〳〵慄えて居るものがある、

『こりや起きろ！』

と蒲團の片隅に手を掛けてグイと引ッ剝ぎました。最う五十餘りの爺さんで、素より抵抗する氣力のある程の者ではなく、縱や兩刀を挿すまでが身分の輕い、取るに足らない下賤の者らしく思ひましたから、

『其方は何者だ！』

と再び聲を掛けますと、急に勃然と起きて一目散に逃げ出さうと致しまするを、十郎左衞門猿臂を伸ばして、

『待て！』

と領首掴んで引据ますると、爺さん悲しい聲を立て、

『何うぞ御勘辨を……生命ばかりはお助け下さい……』

と領首掴まれて鷹に捕るゝ小雀の身動きもならず、手を合して只管に哀を乞ふて居りまするに、十郎左衞門も惻隱の心を生じました、素より殺す氣はありません。

『オイ、其方は何者だ』

『ハイ〳〵、私は料理方の手傳ひで……當家の樣子は一向に存じて居りません、何うかお慈悲でお見逃しを……』

『ウム、料理方の手傳ひ……』

『ハイ、左樣で……決して僞りは申し上げません。』

とます〳〵慄え戰き齒の根も合ず、ブル〳〵身を慄ひ恐怖に襲はれて居りまする。

『拙者が吩咐を守つて用を便ずるに於いては生命は助けて遣はすが……若し知らぬなどと申すときは、是れこの一刀でな、よいか其方の首は飛んで了ふぞ。』

と脅迫しますと、聲を立てることも出來ずいよ〳〵慄えあがつて僅に首肯き、只合掌して涙をホロリ〳〵と溢して居りますから、十郎左衞門は人の生命は斯くまで惜まるゝものかと、可笑しさを耐へま

して、

『如何にも生命は助けて遣らう……さア言へ、蠟燭の在所を……』

『ハ、……ハイ。』

と漸う返事はいたしましたが、猶ほモヂ〳〵して判然と答へません

ので、少々〳〵焦慮氣味で語氣荒く、

『さア言へ……其方の知らぬことは有るまい、何うぢや』

と掴んだ頸筋一振二振ゆり動かしまして、威喝つけると今にも首が

飛ぶかと恐れ、

『ハイ〳〵、申し上げまする……ろ、ろ、蠟燭は……そ、そ、そこ……』

『なに、蠟燭はそゝ……そこでは解らぬ、何處にあるか判然いへ。』

と十郎左衞門はぐづ〳〵して居るが迂しく、グッと強く掴んだ手に

力が這入ますると、

『あ、痛い〳〵、何うか御免なされて……お手をお放し下さいます

ると、蠟燭は出して差上げまする。』

と泣聲を出すに、然らば放してやると十郎左衞門は、掴んだ手を放

しまして、

『それ放して遣はした、直ぐ蠟燭を出だせ……何をぐづ〳〵して居

るのぢや。』

と言葉はいよ〳〵鋭くなる、料理方の手傳人はオヅ〳〵身を起し、

片隅の押入を開けて一函の蠟燭をヒョロ〳〵しながら持ち出しまし

て、十郎左衞門の前に平伏いたし只管哀を乞ふさまの、如何にも憐

れでございましたから、

『この一函きりないか』

『まだ二函三函は……あれ、彼の通り積んでおぢやりまする。』

と後を向きて指を押入の中へ指ました。十郎左衞門が見ると成程、

同じ函が幾個も重ねてありますから、是れで好し、これだけあれば

間毎〳〵に點火ても、夜の明るまでに燃し切れるものでないと首肯き、

『約束だ、生命だけは助けてやる、何處へでも逃げろ……若し手向ひでもしたら生命がないぞよ。』

と放し遣りまするとと、彼れはホット溜息つきて暗黑に紛れ、勝手知つたる室内を何れへか逃げ匿れて了ひました。

十郎左衞門は思ひのまゝに蠟燭をふんだんに得ましたから、早く此處彼處の座敷〳〵へ火を點け廻ります。今まで鼻摘まれても知れぬ室内、戸障子は手當り次第に撲き毀し、足蹴に掛けて踏み摧き、僅に雪を照す月明りを室内に引きましたものゝ、少し奥まりたる座敷は暗黑界でございましたのが、十郎左衞門が機敏の働きで、間毎〳〵に蠟燭は惜氣なく點けて晝を欺くやうに成り、味方の掛引き室内の捜索に大層な便利を與へました。

磯貝十郎左衞門が間毎〳〵に燈火を點けました氣轉は、敵の二人三人斬り斃したより遙に大なる手柄で、味方の勇氣を增させたこと莫大の功でございませう。然れば之れに氣を得て進退の掛引きは勿論、足場も自在となりましたので、ソレと言ひ合したやうに氣を揃へて、雨戸障子は申すに及ばず、襖に至るまで奥へ〳〵と進むに從ひ、蹴こわし打毀きする音は物凄く、敵の上下を戰慄させまするうちに、忽ちにして館の内は數百疊を敷く大廣間の如く成つて、明晃〳〵たる燈火は次第に殖ゑてまゐり、蟻の這出るも一目に見え透く樣に成り、味方の戰ひのさまは有り〳〵と一幅の畫圖を展開したパノラマのごとく映じ、上野介いかに巧みに匿るゝとも、或は逃走を圖るとも、天翔る鳥地に潛る土龍蚯蚓にあらねば遁れる路とてございませんで。

二〇　居間の立退

表玄關から討て入りました東組の一手に向つては、隨分激しく抵抗したものもあつて、闇中に白刃の光り閃き、戞々の響き凄く室内に籠り、悽愴の氣肌膚を襲ふやうでございましたが、西組の裏玄關を破つて亂れ入りました時は、殆ど抵抗する者が無かつた程で……僅にお坊主の鈴木松竹が、戸障子を打ち毀す音に吃驚いたし、逃走路の戸惑ひをして小玄關にヒヨロ〳〵出て來たを、關東猛進派の旗頭として武雄絶倫、同盟の勇士から尊敬されて居りまする堀部安兵衞が、藁人形を斬るごとく水も溜らず大太刀の一撲に、聲も得立ずドタリと斃れたばかり、暗を縫ふてバタ〳〵と逃回る男女の悲鳴、グワラ〳〵〳〵バリ〳〵〳〵ドタリバタンの破壞の音に荒膽を潰し、殊に十郎左衞門の氣轉で、間毎〳〵に蠟燭を點て室内を照したから、

追々奥へ〳〵と進んで行きました。

斯ういふ光景から見ると奥向には豫て用心も手薄であつたかと疑はれますが、決して其樣譯ではない。吉良[illegible]とは自分の邸内に居[illegible]怖をして用心の上にも用心をいたし、[illegible]邸に身を潛め、大藩の庇護を受けても猶ほ枕を高く眠られなかつた程でございますから、上野介が家に居ますのに、其の住居にいたして居る奥向き、隱居所の住居を手薄な警護で安閑として居ませうや、近頃復讐風説も人の噂の七十五日過ぎて、世間の記憶にも遠ざかり、又吉良家は直接の關係もあること、上杉家とて重姻の親子關係がございますこと、赤穗遺臣の擧動に就ては探偵に非常の苦心をして、只管その防ぎ方に心を用ひて居るは、上杉家から附人として十餘人の屈强な剛の者を吉良家へ入りこませて、萬一の備へ嚴重であつた程で、大石等の欺計

に掛つて幾分か弛んだかも知れませんが、決して枕を高く寢て居る氣遣ひはなく、相當な宿直も居たことは明かでございまするに、夫れ等は不意の襲擊に遇ひ、殊に火事よ〳〵と叫ばれたに狼狽した結果であらうと思はれます。

こんな想像は暫くおき、當夜吉良家では茶の湯の催しがあつて、其の座敷は內玄關より上ると右の次の間をまた右に取つて廊下に出て、尙ほ一室を通りぬけて茶室……數寄屋がございますから、當夜は此處に風流な會が催されまして、上野介の居間へ入りましたは亥の下刻、今の午後十時過ぎ。この居間は茶室を廊下へ出で鍵の手に右に曲り、突當つて左に緣側傳ひ中庭を隔てた一室の次二室が上野介の居間でございます。此の居間と押入を隔てた裏手の北向に溜の間があつて、宿直のものは此處に休息して居るが例でございますから、今夜も此處に寢てゐた者もある、又身分のある連中には、夫れ

〳〵居間の手近に宿直の場所が設けてあつたさうで……併し何處が宿直部屋であつたかと云ふことは未だ確な證據を見出しません。

裏門から上野介の居間までは、間數にして直徑約二十餘間で、玄關より上り寄附の間からは四間を經て、中庭をおき次の間があつて居間となるので、間數としては五室を隔つて居りまするが、[illegible]十餘間の處、裏門の破壞される音も手に取るやうに響いたでございませう。また火事よ〳〵と騷ぎて喚き散した聲も聽えたでございませう。況して玄關より亂れ入る騷ぎ、戸障子を打ち毀す狼藉を知らずに寢てゐる者はありません。殊に上野介は六十二といふ年齡で目覺いから、裏門が破られる音に目を覺しますと、常に不安の心に驅られて居る身には、直ぐ危險を感じ易く、床の上に起き上した[illegible]は譬に申す、膚に疵もちや鮫がはしるで胸にギックリ來るものでございますから、ハテなと耳を濟して聽くと今度は火事といふ聲がす